

治教秘録

67
532

67-532
1200501281758



始





秘録

東京麴町 厚生閣版



文學博士 福井久藏撰輯 秘籍大名文庫 第一

解題

福井久藏

この一冊には黒田豊前守直邦侯の治教略論、老話、家僕教訓、鳥の音四部を収めた。この四部は合して四教秘録とも治教秘録ともいふ。經世の文字であるが、世に傳はることは極めて少い。本書は鍋島子爵直繼家の中川文庫本に據つた。

直邦は中山藤兵衛直張の三男で、寛文六年に生れた、初の名は直重、通稱三五郎、母は館林の家老黒田信濃守用綱が女、身を幕臣の家より起し、泰平の御代にあたり、諸侯に列せられ、三萬五千石を食んだ英俊である。外祖の家を襲ぎ、館林家に仕へ、徳松君につけられ、西丸に供奉し、天和元年には廩米三百俵を賜はつてゐたが、同三年その薨去により小普請となり、貞享二年本丸の小納戸に列し、尋いで御小性に進み、四年従五位下豊前守に叙せられ、これより頻に祿を増され、元祿十三年遂に萬石の列となり、同十六年又五千石を加へ常陸國

下館に治す。寶永元年從四位下に叙し同四年また五千石を増せられた。五代將軍綱吉の柳澤出羽守吉保が宅に臨まれる時には屢々直邦が邸にも立寄りせられ恩寵他に超えてゐた。

將軍家宣承統の時雁の間詰となつたが、享保八年再び奏者番となり寺社奉行を兼ね、同十七年上州沼田の城に移りてまた五千石を増され西丸の老職となり、加恩五千石、三萬五千石を領し、十二月侍從に進み、在職四年、享保二十年三月二十六日卒す。享年七十。中山の能仁寺に葬り、關鐵直邦萬松院と謚した。夫人は柳澤吉保の養女で、その間に二女があり、瀧川播磨守元長が子直基を養つて嗣となしたが、父に先ちて卒し、更に本多伯耆守正矩が子直純を第二女に配して家を襲がしめた。後上總の久留里に封ぜられ維新前まで世襲した。

直邦は太宰春臺に師事し、治體に明かであつて、身を持すること恭謙で、衆望が高かつた。寺社奉行時代に自ら日蓮の再誕と稱する法華僧を吟味して名裁判を下し、また藩の財用窮乏し儉約を行つてゐた時、老臣等家士の俸祿を三年間借用しようとする時、その説を聽かぬで、自ら奉ずることを菲薄にし、食膳を一汁一菜に減じ、家臣を懲んだので、皆その盛徳

に感じその化に從つた。寺社奉行時代にも世の淫靡な音曲などを禁じて治化に勵めた。病危篤に及んだ時、將軍家より特旨を以て府庫に三根となき人參を下賜されたが、自分の爲に天下の神劑を費すは勿體ないとして返上したといふ。世俗には小松内府と楠公と萬松院とを併せて和國三賢人と稱したと藤原泰貫は本書の跋文に述べてゐる。斯る人の著作であるから、その立言には服膺すべきものが少くない。尙各書の梗概を擧げると次のやうである。

治教略論

治教略論は藤原泰貫の奥書に據ると、享保十八年の著にかゝり、爲政の要を問答式により陳べたもので、まづ「政ヲ爲ルコト如何」との間に對し、人君の政をなす心は仁を第一とすべきを説き、次に「其事如何」との間に對しては人を知ることが第一義であつて、その徳あるものには本を與へ才あるものには事に處せしめる方針により、人を視る法を説き、魏の田文と吳起との問答を擧げ、或は晋の景帝が石苞を用ゐたことを説き、次に人を安するには無

爲の化を以てすべきことを云ひ、王道政治を論じ、太平久しくうち續いてくると、自ら奢侈に流れ、色欲遊興食欲の弊に陥る。これを治するには修身の切要なことを説き、禮樂を以てこれをよきに導くことを述べ、禮の用を論じ、樂の當代に行はるべきものを説いてある。論語中庸詩書の金言を引き丁寧反覆語々傾聴に値するものがある。治政を永くせんが爲に、時に宜しき禮を定める必要を論ずるあたりは當時の弊政を除き大に經綸の志を成さうとした精神が窺はれる。樂に就ては淫聲をとよめ、能樂は雅樂より見れば殺伐の聲があるかも知れぬが、この國に相應するものと見、時に雅樂を奏で人心の和を謀らうとした。

老 話

これも泰貫の奥書によれば、享保十八年の著にかゝり唐の魏徵や漢の諸葛亮の如く、大政補佐の任に當つたなら如何にするとの間に對し、二十一項に分ち君徳を助け天下を安んずることを述べたもので、治教略論の補遺とも見られる。仁愛の道、忠孝の教、無爲の化、人を

用ゐる法、神儒佛の三教、武藝、風雅、親子連枝の上にまで教訓となるべきことを平易に説いてある。

家 僕 教 訓

家僕教訓は泰貫によれば元祿の初の作といふ。然らば叙爵して豊前守となつて、千俵の俸を加へられた當時、家臣を諭したもののか。劈頭に「臣として忠あらざるは臣にあらず」といひ、忠は内心眞實より誠を盡すにありと説き、内外表裏のないことを力説し、學びて道を知り知つて實に至るべく、古來道は品々あるが、當世に行はれるのは孔子の道である。その階梯として四書を極めるが善い。さうして時世の法に合せてその宜しきものを分別すべく、身を修めるには敬の一字大切なるべく、禮は人の規矩であるから忽かにしてはならぬ事を懇切に諭してある。

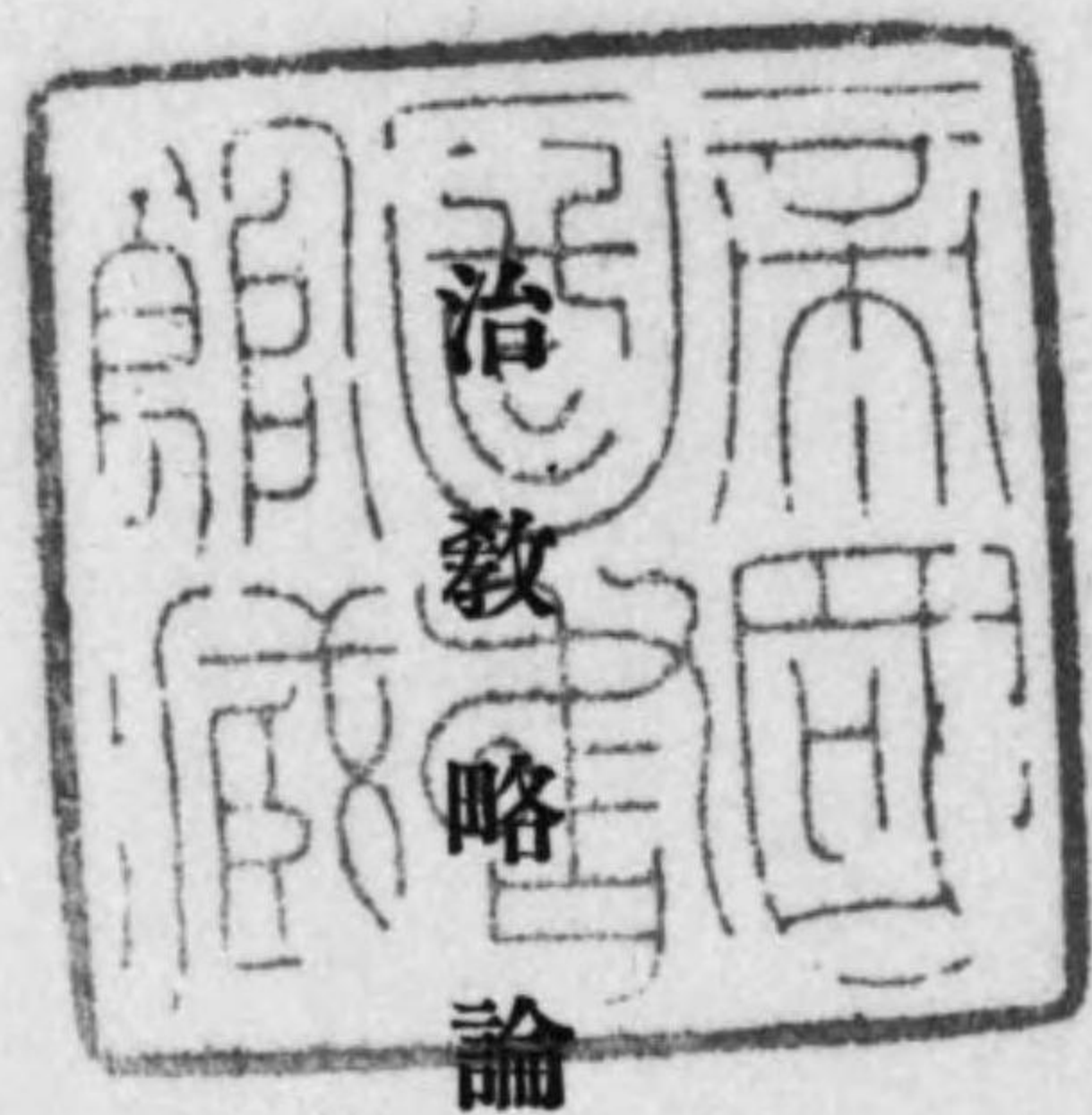
鳥の音

鳥の音は泰貫によれば、享保十六年の起稿にかゝり、瑞春院へ獻じたものといふ。佛教の信仰に關する物語めいた教訓で、大原の里に隱栖あらせられた建禮門院の爲に、大納言の局が嵯峨の奥に行をすましてゐた大徳を請じ、法話を請ふさまに記したもので、大徳がまづ佛の心、衆生の心、みづからの心この三つが一であることを知るのが肝要とし、心の靜寂を説けば、局は心空なれば物なしとの眞義を尋ね、また門院の道心の志深きことを述べ、また阿波の局は陰陽五行説より人生はこの世の外に世界もなく輪廻もなく、後世の成佛を願ふべきにあらずと説く教はいかゞと質し、大徳は聖人の教も佛陀の道もその源は一であることを説き、局は佛の御前で念珠してゐるに妄念が止み難いのを如何にすべきかと質し、大徳は本心にかへるべきことを諭し、局は更に三昧に入る要を訂し、大徳は本心は即ち眞如の躰にして本不生の義を心得るときは安らかに自由を得るに至ると説き、眞言の即心成佛より天台の十界十

如權實の教を擧げ、扇は骨をたねとし紙を助として成るが如しと佛心と修行との關係を示し、次に間に應じて如實知見の經義をことわり、また佛心法界に周徧するといふも我等の如きは及びがたしいふを重々帝網の譬を引きてその誤れるを正し、分理と融通との關係を示し、次に眞如の義に關しては諸法の本體であることをいひ、次に佛道修行の要を問ふに對し、諸宗の教義中、天台の一心三觀より中道實相の心を説き、華嚴の無碍圓融より色即是空、空即是色の義を明し、眞言の事理一圓、煩惱即菩提を説き、機に隨つて信愛すべく、念佛の功德少からざることを説いたもので、書名は末に「教化重々に及べば長き夜いつしか八聲の鳥も驚せば大徳いとま申てまかでぬ」とあるに取つたもので、文章も流暢に教義も易らかに述べてある。この書は後に金地院の僧正に示され伏見佛國寺の願により書寫することを聽されたといふ。

凡例

一、原本には句讀が施してないが、今讀下の便を謀つてこれを加へた。



客問云、政ヲ爲ルハ如何。答云、上仁アレバ下不暴、暴ナラザレバ民安シ。上正ケレバ下直シ。直ケレバ民善ニ勸ム。民安メ善ニ勸マバ天下平治セズト云フハナシ。仁ヲ問答云、論語ニ樊遲問仁、子曰愛人。問知、子曰知人。言コ、ロハ仁ノ發スル所ハ愛也。愛ハ人ヲ愛スルヲ大ナリトス。知ハ人ヲ知ルヲ大ナリトス。夫人君ノ政仁道ヲ以テスルハ唯は一箇ノ愛ニシテ天下ニ普クシテ萬民ニ蔽ナリ。愛ハ是天地ノ心也。天能ク萬物ヲ含藏ス。其中ニ生々スル物人ハ言ニ不レ及、禽獸魚鱉草木金石ノ類、是ニ氣ヲ與ヘ質ヲ與ヘ理ヲ與ヘ各々其所ヲ得セシメ、萬業不碍、皆是レ天地ノ心ニシテ愛ナリ。萬物生々シテ生ヲ不レ遂者ナシ。萬物稟ル所ノ性ハ即チ理也。若シ理ニ戻リ氣ニサカヘバ自ラ斃ル。就中人ハ生物ノ長トシテ全ク天地ノ理氣ヲ受ク、隨テ違フベカラズ。況ヤ人君ハ又人ノ長ナリ。天地ノ心ヲ全メ衆民ニ主トシ愛レ之者レ之天地ノ功ヲ遂テ天地ニ並デ三才ノ德ヲ全スベシ。天地ノ心ヲ全スルハ唯是心ノ愛ヨリ出デ、此愛以テ衆善ヲ蔽フ。故ニ仁ヲ以テ德ノ元トスルナリ。愛ヲ以テ衆善ヲ蔽フハ愛

ハ情ナリ。愛ノ出ル本體ノ理ハ仁ナリ。仁ハ性ナリ。性ニ五性アリ、曰ク仁義禮智信ナリ。其中ニ義禮智信ハ皆仁ニコモレリ。故ニ專ラ言フトキハ、仁トイヘバ其中ニ義禮智信ヲ兼ルナリ。條理ヲ分ツ寸ハ五性ト云ナリ。其發スル所ヲ以テイヘバ、仁ハ愛ナリ、義ハ宜ナリ、禮ハ節ナリ、智ハ辨ナリ、信ハ實ナリ。愛スルユヘニ裁斷ヲ宜ニ從フ、是ヲ名テ義トス。愛スルユヘニ尊卑親疎過不及ナク節ニ從フ是ヲ名テ禮トス。愛スル故ニ善惡ヲ辨テ善ヲ明ニス、是ヲ名テ智トス。愛スルユヘニ實ニ出テ實ヲ爲ス、是ヲ名テ信トス。故ニ一箇ノ愛四端百行ヲ兼ネ其實ハ皆愛ニ出テ愛ニ成ザルハナシ。問、人君政ヲ爲ルノ心當ニ如クスナルベシ。其事如何。答フ、書ノ臯陶謨ニ曰、都在知人、安民ト云リ。此言實ニ政ヲ爲スノ要道ナリ。知人ヲ先ニスルハ、假令バ一家ヲ治ルニ人ヲ知テ其職ニ在ラシメサレバ主人ノ德下ニ不レ及、家事ヲ謀ルハ不レ直、故ニ家不レ活況ヤ國ヲ治ルニ於テヲヤ。天下ノ廣大ナルニ於テヲヤ。但タ知人ハ天下ヲ安ゼンガ爲ナリ。其實ハ民ヲ安ズルナリ。天下皆安キ寸ハ人君何ノ愛カ有ン。

問、知人如何。答、論語田視其所_レ以觀其所_レ由、察其所_レ安、人焉廋哉、人焉廋哉。是レ人ヲ知ルノ法ナリ。所以ノ以ハ爲ノ字ノ意ナリ。言コ、ロハ人ヲ知ント欲セバ先ツ其人ノ所爲善ヲ爲ルヤ惡ヲスルヤト視ルベシ。善ヲ爲ス者ハ善人、惡ヲ爲ス者ハ惡人ナリ。然レドモ其ノ從リ來ル意、義ノ爲ニスルヤ、利ノ爲ニナスヤ、誠ヨリ出ルヤ、外ヲカザリテナスヤ、スルトコロ善トイヘル意ノ從リ來ル所不善ナレバ其善ヲ取ルニ不足、故ニ其爲ル所ノ實ヲ觀ルベシ。其ノ從來スルトコロ善ナレバ事ト心ト相應ノ善人ナリ。然レモ又善ヲ爲スニツトメテ爲ス寸ハ其善未ダ實ナラズ、或ハ時ト止ムコトアリテ其心全ク善ナラズ。故ニ安メ爲スヤ否ヲ察スベシ。好ムコト實ニ善ヲ爲ルハ安ズル者ハ實ニ是レ善人也。如是人ヲ見レバ善ヲ僞リ惡ヲ掩フトイフモソ掩ヒ廋スコト有ンヤト言リ。孟子曰、存乎人_レ者莫_レ良_レ於_レ眸子。眸子不能_レ其惡_レ、宵中正則眸子瞭焉ナリ、宵中不正則眸子眊焉。言コ、ロハ其人トナリヲ見ルニハ人ノ身ニ於テ眸子ヲ見テ知ルヨリ善ハナシ。眸子ハ目ノ黒目ヲイフ也。愚人ハ人ノ見ル

前ニテハ我身ノ能キコトヲツクロヒカザリ惡キコトヲハ掩ヒカクセモ目ノ眸子ハツクロフコトナラヌ者ナリ。其眸子ヲバイカバ見ルゾナレバ、其心正キ寸ハ則チ目ノ眸子瞭ナリ、其心正カラサレバ眸子闇ト也。瞭ハアキラカナリト訓ズ、眸子ノ明ト云ハ潔クニスハリ正キ也。眊トイフハ曇リ動キテスハラザル也。是亦人トナリヲ見ルノ法ナリ。チカク知ント欲セバ人ノ眞實ナルヲ察スベシ。眞實ナル者ニ不善ハナキ也。然レモ主人ナドニモ父母ノ爲ニモツトメテ眞實ヲツクロヒ爲ス者アリ。ツトメテツクロフ者ハ主人ノ一大事ニ及ブ時又ハ父母去ノ後ハ一向ニ其實ナキ者ナリ。朋友ニ信アル者ハツトメテスルニ非ルユヘ多クハ不實ナキ者ナリ。故ニ中庸ニモ不_レ信_ニ乎朋友_一、不_レ獲_ニ乎上_一矣トイヘリ。其生質眞實ナル者ハ心實ナルユヘ何方ヘ向テモ實ナリ。是ヲ以テ人ノ實不實ヲ察スベシ。然レモ心ニ勇氣ナキ者ハ其眞實頼カタキ者ナリ。勇氣アル者ハ己ニ於テ其實ヲ不_レ失、人ニ於テ其實ヲ違ヘズ。加ルニ才知アラバ其人實ニ取用スベキニ堪タリ。人ヲ用ルノ法ハ、論語ニ曰ク舉_レ直錯_ニ諸枉_一則民服、舉_レ枉錯_ニ諸直_一制民不_レ

服、是孔子魯ノ哀公ノ問ニ答ヘ玉フ語ナリ。言コ、ロハ國ヲ治ルニ直キ者ヲ舉ゲ用ヒ、諸ノ枉者ヲ皆々指置テ不用トキハ民其政ニ歸服ス。善ニ從フハ人ノ天性ナレバ正道ヲ立テ直者ヲ用ルユヘ民皆信服スルナリ。枉レル者ヲ舉ゲ用ヒ直キ者ヲ悉ク錯テ不用寸ハ非道ノミ行ル、ユヘ民其政ニ服セザル也。直キ者ハ舉ゲ用ヒ枉レル者トテモ必シモ人々ニ仕置ヲ加ヘ罪スルニモアラス、其マ、サシ置テ不用トキハ枉者ヲノヅカラ直者ノ仕置ニ從テ善ニ移ルナリ。是ヲ能使ニ枉者直ト云リ。使枉者直之語論語類淵之篇ニ見ヘタリ仲弓爲ニ李氏宰ニ問政、子曰、先有司赦ニ小過ニ舉ニ賢才、曰焉知ニ賢才ニ而舉レ之、曰舉ニ爾所ニ知、爾所ニ不知人其舍レ諸、言コ、ロハ孔子門人仲弓魯ノ大夫李氏ガ宰トナレリ。宰ハ家老職ナリ。夫故政ノ仕方ヲ孔子ニ問フ。孔子答曰、先有司トハ諸役人ナリ。事アル寸ニソレトノ役人ニ任セテ其爲ル所ヲ立ルナリ。凡ソ政ハ其元人君ニ出テ、大事ハ大臣執リハカル。ソレトノ役ニ屬タルトハ役人ニ任セ置テ事毎ニ指引ヲ加ヘヌナリ。事毎ニ指引ヲ加レバ役人自分ノ器量ヲ出サズ、上ニ讓リ置テ爲ルト實ヲ

致サズ。彼ニ任セ置バ自分器量一パイヲ盡シ實ニハマリテ事ヲ爲スユヘ事宜ク立ツ也。故ニ先有司トノ玉ヘリ。赦ニ小過トハ過ハアヤマチト訓ズ、心ニ出ヌ罪ナリ。重科ノ者ハ理トノ罪ニ處スベシ。又外ノ見セシメナレバ外ノ惡ヲモ防グナリ。然レモ小過ノトマデ咎メ戒ムルト多ケレバ人々身ヲ危メ安ズルトナシ。故ニ小過ヲバ赦スベシ。舉ニ賢才トハ賢ハ徳アル者才ハ能アル者ナリ。賢徳アル者ヲ舉ゲ用ヒザレバ政正カラズ、下安カラズ、故ニ舉ベシ。才能アル者ヲ用ザレバ事辨ジ難シ。故舉テ用ベシ。曰焉知ニ賢才ニ而舉レ之トハ、曰ハ仲弓又問テ曰ナリ。下ニ屬スル諸役人下士下民多ケレバ悉ク賢才アル者ヲ知り難シ。如何ゾ知テ舉ンヤト問ナリ。曰、舉ニ爾所ニ知、爾所ニ不知人其舍レ諸トハ孔子答テノ玉トナリ。爾トハ仲弓ヲサス。言コ、ロハ仲弓ガ知ル所ノ賢才ヲ先ツ舉グ。上ニ好ム所ヲ下必是ニ從フ。上ヨリ一人ノ賢才ヲ舉レバ上ノ好ム所ナルトヲ知テ他ノ賢才アル者ヲ告ゲ知セ、又ハ各々尊崇スルユヘ自ラ名顯ル、ナリ。是ヲ爾所ニ不知人其舍レ諸トノ玉ヘリ。此章孔子宰職ノ爲ニ教ヘ玉ヘ

人君モ亦最モ知ベキ義ナリ。徳アル者ヲ用ルトオアル者ヲ用ルニハ用ル所ニ差異アリ。徳ハ上ナリ、才ハ次ナリ。徳アル者ニハ本ヲ與ヘ、オアル者ヲバ事ニ處スベシ、魏田文ハ元ヨリ祿ノ相トシ祿位重キ者ナリ。吳起亦タ魏ニ用ラレテ政事ヲ執ル、才智器量勝レテ名高キ者ナリ。然レモ田文始ヨリ相位ニ在テ吳起其下ニ從フヲ安カラズ思テ或時文ニ言フ、魏ニ事ヘテ子ト吾ト孰レカ功ノ勝レタルゾ。功ヲ論ジクテラベントイフ。文モ是ヲ可ナリトス。其比天下七ツニ分レテ各々威ヲ爭フ時ナリ。故ニ起ガ曰ク、魏國ニ於テ三軍ノ大將トナツテ士卒ヲ勵メ君ノ爲ニ戰死スルヲ樂ムヤウニナシ、敵國ヨリ此國ヲ攻メ取ン謀ヲナサルヤウニスルコトハ子ト我トイヅレカマサレルト云フ。文ガ曰クソレハソナタニ不レ及ト答フ。起又曰ク、百官其職ヲ重シ禮儀正ク治メ萬民上ヲ怨ムルコトナクナツテシタシミ、ソノ上ニ貢物不レ忘ユヘ上ニ府庫實テ軍事諸用ノ不足ナカラシヤウニセンコト子ト吾ト孰レカ勝レルト云フ。文ガ曰、是モ又子ニ不レ及ト答フ。ソノ比ノ國勢秦ノ大國豎ニ亘リテ韓魏趙燕齊楚ヲ吞ミ合セントス。韓

魏趙燕齊楚ハ横ニ並ビテ秦ヲ亡サントス。故ニ起又曰ク、西河ト云テ秦ノ境アリ。魏西河ヲ堅ク守リ秦兵西河ヲ超テ東シ魏ヘ出ルコトナラズ、韓趙等ノ國ヨリハ魏國ヲ恐レテ賓客トナリ隨從スルヤウニセンコトハ子ト吾トイヅレカ勝レルト云フ。文ガ曰ク是又子ニ不レ及ト答フ。起ガ曰ク、右ニイフ三ノ者ハ國ノ大事ナリ、皆吾ニ不レ及、功業吾下ニ在テ其位ハ上ニ居ルコト事理不相應ナリ。如何ノ吾上ニ居ルヤトナジル。文ガ曰、王少クシテ其政上ニ不レ出、國人疑ヒ多ク大臣モ疑テ未ダ上ニ附キ從ハズ、百姓モ其仕置ヲ不レ信ニ時節、其君ノ補佐トシテ國ノ大事ヲ屬スルコト起ニ屬センヤ又吾ニ屬センヤト問。起默然トシテ暫時思案ノ答フ。其時節ノコトハ子ニ屬セント云フ。幼君ノ補佐トシテ國ノ大事ヲ屬スルコトハ重キコト也。徳厚ク實深キ者又同姓ナドノ國ニ由緒有ル者ハ自ラ實モ深キユヘ幼君ノ國ノ大事ヲ任ズベシ、才能アルノミニハ此任ニ當ラズ。故ニ此事文ニ屬スルニ於テハ又起ガ不レ及トコロニ起退テ文ガ下ニ在ルコトヲ安ゼリ。文ガ人ト爲リ有徳ヲ稱スルニ不レ足トイヘモ亦國ノ股肱タリ。君ヲ思ノ誠起ガ類ニ非ズ。

故ニ亦タ徳ヲ先トシオヲ次トスベキ勸考ノ一事ナリ。曾子曰可_三以託_三六尺之孤_三可_三以寄_三百里之命_三、臨_三大節_三而不可_レ棄也君子人與、君子人也。是ハ才徳兼備レル者ヲ云。六尺之孤トハ十五以下ノ幼者ナリ。才徳兼備ラネバ遺命ヲ守テ幼君ノ補佐トハ成ガタシ。寄百里之命トハ此句上ノ句ヲ承テイフ幼君ヲ補佐セシメ大國ノ政ヲ此者ニ打任セアヅクルナリ。臨大節トイヘ_レ志ヲ立テ節義ヲカヘザルハ皆是_レ才徳兼備セル者ナリ。故ニ曾子君子之人也ト譽玉ヘリ。又徳義ハ云ニ不及徳義全カラズトモ才能アル者モ亦捨ベカラズ。晉ノ石苞ガ傳ニ晉ノ宣帝ノ繼景帝ノ時石苞ト云者才能アル者ニテ景帝是ヲ舉ゲ用ラル。父宣帝苞ガ好色ニテ小細ノ行事不慎ナルユヘ景帝ヲ讓テ用ラルマジキヨシヲノ玉フ。景帝答テノ玉ハク、苞ハ細行不足トイヘ_レ經國ノ才略アリ、平生貞實廉直ナルトテ必シモ能ク世務ヲ經濟スル_レアタハズ、齊ノ管仲漢ノ陳平ガ如キモ桓公管仲ガ奢僭ヲ忘レ、高祖陳卒汙行ヲ捨テ才略ヲ用ラレシ也。石苞ガ事上ノ兩人ニ不及トイヘ_レ、亦今日ノ選ニハ石苞ガ才略ニ及ブ者ナシト答ヘラル。景帝ノ政務

必シモ可取ニアラズト雖モ才略アル者ヲ不_レ捨ノ義見ルニ足レリ。問、安_レ人如何。答、安人_一ハ天下ノ人ヲ各々其所ヲ得セシムルナリ其所ヲ得テ人々安ズルノ仕方ハ唯ダ有ベキヤウノ_一ノミヲ沙汰シテ民ヲ役スル_レ繁カラザレバ自ラ人安_レ之、則是ヲ政ヲ爲ルニ無爲ヲ以テストイフ。法度條目多ク出テ制度嚴ニ_レ民ヲ教ル_レ委ク、善ヲ勸ムル_レ細カナレバ民ノ勞トナリテ安ズル_レアタハズ。法ハ民ヲ不_レ善ヲ戒メ罪ニサカラシメテ民ヲ安ゼンタメナリ。然ルニ法繁キ寸ハ民勞シ國穩カナラズ、人君若シ不_レ善ヲナサバ日々ニ命令ヲ出シ戸々ニ教戒ヲ示ストモ、民不_レ從、人君身正ケレバ不_レ命令ヲ出_レ民ヲ戒メ聲ニ屬ス威猛ヲ以テ民ヲ威スハ色ニ屬ス教化ノ末ナリト云義ナリ。人君内ニ徳ヲ積ム寸ハ不_レ賞トモ民勸ミ不_レ威トモ民鑊鉞ヨリモ威ヅ。詩ノ大雅抑ノ篇ニ曰ク、相_一在_二爾室_一尙不_レ愧_三于屋漏_一ト云リ。言コ、ロハ屋漏ハ屋ノ中ノ奥ニ_レ顯ハニ人ノ不_レ見所ナリ。愚人ハ人前ヲノミ慎テカクレタル所ハ不_レ慎ナル者ナレ_レ、君子ハ内ヲ

慎ムユヘ屋漏ニアルヲ人ニ見セテモ愧ルヲナキ也。内ヲ慎ムトイヘバトテ屋漏ニ在テ
 嚴ニ過ルヤウノヲニハ非、唯ダ有ルベキヤウニ在ルガ人ニ不レ愧義ナリ。君子ノ德ハ
 平常ニ替リタルヲハナキ者ナリ。唯アルベキヤウニ不善ナキガ君子ノ德ナリ。中庸
 ニ詩ノ周頌烈文ヲ引テ曰ク、不レ顯惟德、百辟其刑之、是故君子篤恭而天下平ナリト
 云リ。言コ、ロハ德ハ内ニ在ユヘ外ニハ見ヘズ、人君内ニ德ヲ積ムヲ厚ケレバ自然ト
 其誠外ヘ發シ顯ハル、者ナリ。内ニ積ム德トイフハ或ハ詩文章ニ巧ニシ風雅ノ美アル
 ヲ云ニ非ズ、或ハ藝術ヲ得テ習練ノ譽アルヲ云ニ非ズ、或ハ才知ガ量アリテ人ヲ懷ケ
 人ヲ劫スヲ云ニ非ズ、内ニ至誠ノ德ヲ積メバ自然ト外ニ及ビ其化近キヨリ遠キニ至リ
 近國及ビ遠境ニ傳ヘテ皆悉ク信服ス。殊ニ人君ハ天下ノ仰ギ望ム所ナリ。故ニ天下ノ
 諸侯是ヲ則リ手本トスル也。百辟トハモ、ノキミト訓ズ。天下ノ諸侯ナリ。天下ノ諸
 侯皆人君至誠ノ德ヲ見聞ノ學ビ則テ自國ヲ治メ人君ノ德ヲ慕フ寸ハ天下治ラザルヲア
 ランヤ。如レ斯近キヨリ遠キニ及ビ百ノ諸侯則リ手本トスルハ唯ダ至誠ノ德ナリ。至

誠トイフハ外ニ在ルニ非ズ人々ウケタモチテ在ル眞實ノ至レルナリ。是レ至尊ナル者
 ニノ元來ノ自位也。至寶ニ昔ヨリ我ニ有ス、是ヲ得ルヲ財寶モ不レ入力量モ不レ用ノ
 志アレバ則チ得ル也。唯ダ幾重モ重テ内ニ積ムベシ。是故君子篤恭天下平ナリトハ上
 ニイフ内ニ積ム所ノ德アレバ篤ク恭キナリ。近クハ見望ミ遠クハ聞傳ヘテ百ノ諸侯刑
 之故ニ君子有德ノ人ハ唯己ニ於テ誠ヲ積ムヲ篤ク恭ク慎ミ深シ。人君既ニ如レ斯。身
 正ケレバ不レ賞トモ民勸ミ不レ威トモ民懼ヅ。内ヨリ外ニ至リ近ヨリ遠ニ及テ其德ヲ慕
 ヒ其化四海ニ充チ滿ツ。天下平ナルヲ可レ知。子曰爲レ政以德、譬如北辰居ニ其所而
 衆星共之、此語論語爲政篇ニ見ヘタリ。言コ、ロハ爲レ政以德トハ人君天下ヲ治メ
 ントノ政ヲ爲ルニハ外ノ政令ヲ以テ先トスベキニ非ズ、内ニ至誠ノ德ヲ以テ民ニ臨メ
 バ不レ動メ化シ不レ言メ信アリ。無爲ノ成ル是レ人君無爲見聞ノ化スルヲ如是。譬ヘ
 バ天ノ北極星ハ天軸ニ在テ其所ヲ不レ去自餘ノ衆星ハ天ノ旋轉ニ隨テ日夜常住見ヘ隱
 レスレモ北極星ノ四面ニ列居ノ望ミ向フヲ其象君ニ從フ諸臣ニ似テ人君無爲ノ政ヲ以

テ天下ヲ治ルガ如シ。故ニ是ヲ以テ譬トス。論語曰、子曰無爲而治者其舜也與。夫何爲哉、恭己正南面而已矣。言コ、ロハ無爲而治者トハ有ルベキヤウノコニ從ヒ新規ナル法度條目ヲ不_レ出、天下治政ノコトシハ何箇爲ルコナケレ_レ天下皆上ヲ敬ヒ禮義厚ク慎ミ護リテ天下安寧ナルヲイフ。如_レ斯無爲ニシテ治ルハ舜ノ代ナラントナリ。堯舜同ク古代ノ聖王ナレ_レ堯ノ代ニハ洪水溢レサカンニシテ水ヲ治ルニ勞シ、ソノ上共工ヲ流シ驩兜ヲ放チ三苗ヲ竄シ鯀ヲ殛ス等ノコトアリ。舜ハ堯ノ聖代ヲ繼受御身至誠ノ德ヲ惇シ、天下皆其德ニ服スユヘ何ノ爲ルコナフ_レ無爲ニシテ天下治ル也。夫何爲哉、恭己正南面而已矣トハ如_レ右天下治ルコトハ舜ハ夫何ワザヲ爲_レ如_レ斯ノ治ヲ爲_レスヤト尋ルニ舜ハ至誠ノ德ヲ以テ穆々トシテ其位ニ在_レテ慎ミ深ク己ヲ恭_レ些少モ德ニ欠ルコト無ク正ク南面ノ群臣ニ臨ミ玉フノミニシテ天下安寧ニ治レルナリ。無爲ノ義ハ後世ノ政事ハ上古ノ如キニハ非ルベシ。然_レ_レ_レ大ヤウ同ジカルベキ歟。内ニ至誠ノ德ヲ積ミ古禮ヲ改メス小細ノコトニ不_レ亘、法令不_レ繁小利ヲ不_レ考、一己ノ才覺ヲ不_レ立總テ新法ノ珍シキコトヲ

不_レ出カ無爲ノ仕方ナリ。世ノ風俗衰へ人ノ性質薄シトイヘ_レ此正道ヲ以テセバ相應ニ天下安寧ナランコト掌ヲ指スガ如シ。問、子ガ教ル所ハ詩ヲ引論語中庸ノ語ヲ引ク、聖人上古ニ在_レテ天下ヲ治ルコト正ニ如_レ斯ナルベシ。今日ノコトニ非ズ。答、吾子慙ニ問、吾_レ實ヲ以答。豈空言ヲ以センヤ。古今時異ナリトイヘ_レ道同ジ。上ニ聖德アレバ下其化ヲ受ルコト厚_レ廣シ。上聖德ニ及バザレバ其化次_レ之。後世有志ノ人君其道ヲ以テ治ル寸ハ人君ノ其德ニ隨テ又化ヲ不_レ受者ナシ。是_レ則王道ニシテ政道ノ本ナリ。迂遠ナルニ似テ却テ近キ道ナリ。霸道ヲ用ルガ如キ其事善ヲ撰テ爲_レトイヘ_レ專ラ見聞ノ爲_レニシテ其心實ナラズ。故ニ四民其善ヲ聞テ一旦歸服ストイヘ_レ其心實ナラザルユヘ久カラズ_レ之。覇君ニ不_レ及ノ人君利口作意ヲ以テ事トシテ國ヲ治メントス。國ヲ治ルコトアタハズ政事出_レバ出ルニ隨テ皆違ヒ、爲_レバ爲_レルホド惡キナリ。一己區々ノ作略ヲ以テ天下ノ大事ヲ謀ル何ゾ其レ中ルベケンヤ。凡ソ政事ニ預ル者ハ無心ニシテ事ヲ謀ルベシ。無心ト云ハ心無_レ偏倚ノ謂ナリ。今ノ有司ノ如キハ有心ニシテ利ヲ先トス。有心ト云ハ心

倚ル所アルナリ。或ハ利ニヨリ或ハ譽ヲ先トシ又ハ好ム所アリ嫌フ所アリ、上諂ヒ下ヲ虐ス、故ニ道ニ違ヒ遂ニ共ニ利ヲ失フ。此有心ヲ以スル者ニハ天下ノ大事與ニ謀ルベカラズ、若シ此意得ナケレバ彼利口ニ迷テ遂ニ其謀略ニ入ル、人君心ヲ可用トコロナリ。漢曹參天下大亂ノ末秦ノ苛政ニ次テ齊ノ國ヲ治ム。無爲ヲ以テ齊國治平ス。其後蕭何ニ繼テ漢ノ相ト成テ天下ノ政ヲ執ル。又無爲ヲ以テ天下大ニ治ル。宋ノ蘇軾東坡蓋公堂記ヲ作テ言フ。病デ三タビ醫藥ヲ用ユ、藥違フユヘニ巨多ノ病起テ不癒。是ヲ政事ニ下手ニ國不治ニタトヘタリ名醫アツテ藥ヲ止シム。七日ガ中ニ驗ヲ得、後ニ良藥ヲ服メ本ニ復ス是ヲ無爲ノ政ヲ産ルニタトヘタリ政事モ亦如斯ナリト云テ、曹參ガ政事無爲ニシテ治ルヲ、述タリ。俗醫ノ病ヲ見ルコト不詳私知作略ヲ以テ藥ヲ用ユ故ニ種々ノ病發起ス。是レ政事ニ作略ヲ用テ不レ治ガ如シ。良醫ニ遇テ平復スルハ曹參ガ無爲ヲ用ルニ似タリ。上ニ言フ所ハ老莊ノ道ヲ主トストイヘモ是レ亦聖人無爲ノ道ニ不レ遠、故ニ齊國治リ天下亦安シ蘇軾ガ人ト爲リ敬畏スルニ不足トイヘモ彼ガ言所問取ルベキ者アリ。是亦其一事也。問、政

事ノ道路其要ヲ聞クコトヲ得タリ。身ヲ修ルコト如何。答、修身ハ政事ノ本ナリ。上ニイフ無爲ノ政ハ修身ノ功アラズンバ無爲ノ政立ツコトナシ。大學ニ曰欲レ修ニ其身者先正ニ其心、欲レ正ニ其心者先誠ニ其意ト云リ。修身トハ我が一身ノ内ニアル心ヨリ外ニ及ブ事業マデ宜クト、ノホレルヲ云ナリ。心身ノ主宰ナリ。心正ケレバ自ラ身修ル。是ヲ以テ身ヲ修ルコトハ心ヲ正スルニ在リト云フ。心正トハ心ハ仁義禮智信ノ徳ヲ體ト是ヲ性ト云元ト正キ者ナリ。然ルニ外ニ發スルハ喜怒哀懼愛惡欲ノ情ヲ用トシテ是ヲ七情ト云此情ニ牽レテ内ノ正ヲ失フ也。スベテ見ル物聞ク物ニ就テ心偏著シ常住邪曲ノ内ニ畜ルユヘ心ノ體好ム所ニ倚リテ不レ正。是ヲ正スルニハ心ノ發用ニ就テ慎ムベシ。故ニ欲レ正ニ其心者誠ニ其意ト云リ。誠ニ其意トハ心ノ發スル所ヲ眞實ニスルナリ。善ト思フコトヲ不レ爲惡ト思フコトヲ爲スハ是レ我が氣ノ好ミ嫌フ所ニ從フユヘナリ。是ヲ自欺ト云フ。意ヲ誠ニスルコトハ善ト思ハ、不レ好コトニテモ不レ爲是レ誠ニ其意ナリ。曾子曰爲レ人謀而不レ忠乎、與朋友交而不レ信乎トハ人ノ事ヲトリハカルニ我身ノ上ノ如ク誠ヲ盡

シ朋友ト交ルニ不信ノ言ヲ不爲。是レ人ノ交リニ誠ヲ盡ナリ。孔子曰立ツ寸ハ則見其參於前也、在輿則見其倚於衡トハ平生忠信篤敬ニ志ヲ修行スレバ人ト交ルニハ則其所ニ忠信篤敬歷々タルヲ見ル。是レ志深メ行住坐臥ニ忘レザルナリ。吾子自ラ行ント欲セバ唯ダ何事ニヨラズ一向眞實ナランヲ思フベシ。是レ仁恕ノ事ナリ。此眞實ト云モノ一文不通ノ者モ能ク知レルヲナリ。人毎ニ己ニ在ルユヘ外ヘ借リ用ルト云フモナシ。貧賤ノ者ニモ持分ニ具ル者ナレバ不足ナルヲナシ。常々眞實ヲツトメテ其眞實ノ深キハ則チ徳ノ厚キナリ。最モ學知ナケレバ誠用ルニ思ヒ違アルユヘ學問ヲ爲メ知ヲ明ニスベシ。知明ナレバ物ニフマヘアルユヘ勇氣募リテ物ニ不レ屈、誠ノ志ヲ遂ル者也。此知仁勇ノ三達徳ハ鼎ノ三足ノ如ク一ヲモ欠クベカラザル者ナリ。如ク斯ニ身修レバ此修レル身ヲ以テ萬事ニ應ズルニ道ニ違アルヲナシ。家ニ在レバ家齊ヒ國ニヲケバ國治リ天下ニヲケバ天下平也。身ヲ以テ本トス。本立ツ寸ハ末成リテ天下國家治ラザルヲナシ。中庸ニ曰ク、上天之載無聲無臭至矣ト云リ。是ハ誠ノ至極ニ至

リ天地ノ徳ト一致ニ成ル位ナリ。其ノ至極ノ誠ト云者今日常人ノ一念起ル眞實ノ誠ト同體ナル者ナリ。一念起ノ誠ヲ行住坐臥ニユキ亘リ幾重モ厚ク積テ其至極ヲ盡セバ天地ノ徳ト齊キ位ヲ得ルナリ。吾子深思之。又問、禮樂ノ事如何。答、禮樂ハ天下風俗ヲ爲スノ基本ナリ。又是レ無爲ニシテ治ルノ術ナリ。孝經ニ曰ク、安レ上治レ民莫レ善ニ於禮、移レ風易レ俗莫レ善ニ於樂ト云リ。禮立ツ寧ハ上下ノ分定ル故上安ク民治ル。樂行ルレバ性情ヲ養ヒ風雅ニ浴メ其好ム所正路ニ向フ故ニ風俗ヲ宜ス、則チ是レ先王ノ道ニシテ力ヲモ入レズメ天下ヲ治ルノ法ナリ。今皆廢ル。廢ルトイヘル其理猶ヲ存ス。禮ハ敬ナリ、樂ハ和ナリ、敬和ノ道常ニ失フベカラズ。是故ニ禮樂ハ斯須モ身ヲ去ルベカラザルノ謂ナリ、禮ニ大體アリ大儀アリ、小節アリ、三綱五常ノ如キ、君臣父子夫婦兄弟朋友各其禮ヲ不レ亂。是ヲ禮ノ大體ト云。三代ノ教及ヒ下百世ニ至リ和漢ニ此禮不レ易。若シ此禮ニ違フ者ハ身不レ立家喪フ也。冠婚葬祭ノ如キハ始ヲ慎ミ終ヲ成シ本ヲ立テ恩ニ報ユル等ノ義ニシテ禮ノ大ナル儀則ナリ。故ニ大儀ト云フ。小節ハ平生ノ集

會音信贈答洒掃應對進退等ノ小細ナル禮節ナリ。畢竟大儀小節ハ禮ノ大體ヲ扶テ五倫五常ノ道ヲ立ルノ法也、サレバ禮ハ高キモ卑モ一日片時モ離レザル要道也。大體ハ古今不易ニシテ大儀小節ハ時ニ宜メ代々ニ相改ル。夏ノ禮ハ殷ノ時用ヒ難ク、殷ノ禮ハ周ノ時ニ用ヒ難シ。三代世ヲ掌ルノ始メ禮ヲ改ルコトハ必シモ天下ノ視聽ヲ改ムルノミニハ非ズ。時ニ宜カラザレバ禮不行ユヘナリ。是故ニ三代ノ禮適々方策ニ存スルコト有リトイヘル本邦ニ用ヒ難ク、本邦上古ノ禮僅ニ存ルコトアリトイヘル今世ニ用ヒ難シ。近代室町家ヨリ禮ト唱テ似タルコトアレルサレド夫レサヘ多クハ私ノ家々ニ作意セルコトノミニ取用スルニ不足。今ノ世ニ禮ヲ定メント欲セバ、聖君有テ賢臣ヲ用ヒ今ニ宜キ禮ヲ定ムベシ。夫禮ハ儉讓ヲ本トシ過ルヲ節シ貴賤上下ノ分辨アルヲ以テ善トス。而モ時ニ宜スルハ理勢ノ至ル所ニシテ人情ノ好惡ニ不違ベシ。是レ禮ヲ定ルノ大意ナリ。然レモ今ノ世人々輕薄ニ流レ財用ニ窮スル時勢ナレバ何程能キコトヲ聞テモ耳ニ不レ入ナリ。故ニ唯ダ先本ヲ厚メ無爲自然ノ化ヲ見ルニ如クハナシ。本ト云ハ君主ナリ、君主德ヲ厚メ

無爲ノ道ヲ以セバ天下大ニ治ラン。其治ル時ニ臨テ禮法ヲ定ムベシ。禮ナキ寸ハ久カラズメ又失フ。治レル世又無ソノユヘハ聖主賢君世々ニ繼グコトアタハズ。故ニ治久キ寸ハ或ハ奢侈ニ失シ或ハ色欲ニ失シ遊興ニ失シ貪欲ニ失ス。食欲ノ者ハ身ヲ厚シ家ヲ厚ナキヨリ失起テ種々ノ惡事ヲ恣ニスルユヘ是ニ於テ止事ヲ不レ得メ制法ヲ出シ禁戒ヲ立テ誅罰ヲ繁クスレバ一旦恐ル、ノミニ心ニ服セズ。故ニ一人ヲ罰スレバ旁ニ三人ノ科人起リ、三人ヲ罰スレバ四方ニ拾人ノ罪人出來ル。是ニ於テ又法令繁ク誅罰嚴ニメ無爲ノ化ヲ失フユヘ、時ニ宜キノ禮ヲ定ルハ治世ヲ永センガ爲也。奢リハ婦人ヨリ起リ色欲ハ遊興ヨリ起リ、殘暴ハ貪欲ヨリ起ル。皆豫メ禮ヲ立テ禍ナカラシメントス。法制ハ戒ルノ義ナリ。故ニ信服セズ、禮式ハ各々安ズルノ道ナリ。故ニ人々信服ス。其事ハ今演說シ難シ。後日ノ談ノ期スベシ。樂ハ人心ノ和ヨリ出ツ。禮ノ用ハ和ヲ貴トス。和ニ非レバ禮行ハレズ。君臣父子夫婦兄弟朋友ノ倫モ和ニ非レバ調ハズ。其和內ニ盈テ聲ニ發ノ歌トナル。器ニ移メ樂トナル。天性ニ本ヅケテ人心ノ樂ム所也。禮

ハ屈シ樂ハ伸ブ。屈スルミノ伸ルヲナケレバ屈スルニ不堪、伸ルノミノ節スル
 ヲナケレバ放逸ニ流ル。禮和互ニ相待テ天下ノ治成ル。是ヲ以テ聖代ハ云ニ不_レ及、本
 邦文華盛ナル時代雅樂專ラ行ル。王代ノ末ヨリ謠モノ失_レ雅樂衰フ。然ルニ器存シ譜
 ヲ傳ルユヘ雅樂ノ音ヲ全_メ今ニ古代ノ例ヲ存_メ帝都ニ行ル。然レ_モ謠者失タルユヘ德
 音祝音哀音等ノ分チヲ聞得ル_ヲ無_ク情意ニ感スル_ヲナキユヘ世情ニ不_レ相應ノ雅樂廢ル
 ヲ久シ。推古帝ノ昔時聖皇太子秦大連トモ謀テ世人ノ爲ニ猿樂三十六番謠舞ヲ造ル
 是_レ神樂ノ五直_{イッナラヒ}ニ舞フ足ノ踏ヲ加ヘ弟鼓兄鼓ノ撥調ヲ改テ指調ト爲シ、猿女ノ君ノ傳
 ニ本ヅイテ是ヲ猿樂ト名ク或說ニ曰ク神樂ヲ略セルユヘ神ノ字ノ偏ヲ除テ申ト_シ申樂ト名ク。田樂ハ申樂ヲ略セルユヘ申ノ上下ヲ略シテ田樂ト名ルナリ。住吉大
 明神巫ニ託_メ告玉ハク、謠舞ハ吾ガ體ナリ。此伎吾國ノ風ニ合フ。宜ク祭祀ニ奏スベ
 シ。願クハ此伎ノ端ニ先ヅ吾ガ三神ヲ容_カリアラハセド、皇太子則チ重テ白翁肉色黒面
 三番ノ面ヲ造ル已上舊事本紀ノ說今ノ三番叟ナリ。此外今ニ傳ル所ハ弓矢ノ立合・舟ノ立合等ニ
 ヲ其余ハ傳ハラズ。一變_メ今ノ能トナル。雅樂ニ非ズトイヘ_モ又淫聲ニ非ズ。雅樂ヨ

リミレバ殺伐ノ聲アル歟。此國ニ相應セルヤ久ク世ノ翫トナル。舞ニハ殊ニ從容不迫
 ノ氣ヲ專トス。又小哥淨瑠璃三線類ノ俗樂アリ。是レ悉ク淫聲ニ_シ丈夫ノ翫_ベキ者
 ニ非ズ。今夫レ世ニ普ク雅樂ヲ行ハント欲ストイフ_モ世情ノ好マザル所ナルユヘ行ル
 ベカラズ。禮ヲ定ル日ニ於テハ唯ダ折節ニ管絃音樂ノ類ヲ興セシメ世人ニ雅樂ノ用ユ
 ベキ_ヲ知シメンノミ。猿樂ヲ捨テバ俗樂淫聲專ニ_シ人情倍ニ牽々放迭ナラン。不_レ
 如俗樂ヲ捨_ン爲ニ猿樂ヲ以テ世人ノ翫トセン。雅樂ノ由ル所ハ和ナリ、雅樂行ハレズ
 ンバ和ノ道全カラズトイヘ_モ、人心ノ和ヲ專トシ敬ト和トヲ以テ世ヲ治メバ禮樂ノ本
 茲ニアリ。禮樂廢シテ世教ヲ爲サズト云ベカラズ。

老

話

客問云、吾子唐の魏徵が職におり漢の諸葛亮がごとく後主を託せば政事を補佐せん事いかじ。

答云、政は人君みづから身を以て天下に教へ、徳を以て萬民を安んじ給ふべし。補佐の任は人君と合體し、君徳をたすけて天下を安ぜんのみ。いささかおもふ所のあらましを述むをばねんごろに聞給へ。

一、人の君世を治る事は天の萬物をめぐむこゝろをうけつぎて仁愛を專にして萬民をめぐみ、をのくその所をえてやすんずるを第一とす。世事萬變に應じて或は取用ひ或は捨置又は祿をあたへ罰を行ふ事、皆正直にはからひ給へば、民歸服して天下治るなり。人君の身を以て天下を教ふる事はかはりたる事もあらず、有べきやうの事のみにて孝弟慈の道をたて、たゞ何事も誠の道をつとめて假初にも惡事をせざるより外の事はなきなり。

一、誠のみちは君につかへて忠、親にむかへば孝、民にのぞめば慈なり。たゞ眞實におもひはかるなり。この眞實と云ふもの内にありてはいかやうといふかたちなく、何さまの色もなく、しかもたかきいやしき誰しも内にそなへてあるゆへ外にもとむる事もなく、むつかしくたづぬる道にもあらず。心をだにつくればえらるゝ誠なり、則天の道にして人にそなはる物なり。

一、下民ををしゆるに法度條目しげきはよろしからず。それもなければかなはざる義も有べし。しかれども法度條目しげく出せば人くるしみてよからず、無爲にしておさむるをよしとす。

一、無爲にして治るとはあるべきやうの外には何事もせざるなり。先代より有來る禮式等をばあらためず、惣て仕置の事何にてもあらたに出す事なく、利口才覺なるをこのまず、たゞみづから誠の道をあつふすれば、ちかき者悦び遠きは傳へ聞て皆ことごとく信服するゆへ、をのづから國おさまるなり。

一、上より出る事は大事なり、義と利とをあきらめてすこしにても利方なる事はさく

べきなり。上にては少しのあやなればみつからの心にはおぼ多給はねども、そのすゑに至りてはひろごりてひとへに利方の事あきらかに聞ゆる故民の心安からず、おもふて上のをきてを用ひず、上をあなどりはなるゝ心あり、是政の大なる害なり。

一、天下の事は一己の心ひとつにて極ればしそんじ有ものなり。この故にむかしの大聖人も問事を好み給へり、人にたづね給ふてその了簡おもはしからねば困るにたらねども、みづからのおもふと畢竟にたるやうの事ならば、人のいふに隨ふをよしとす。上より物をたづね給ふに、取つきならばその者と熟談あらせ給へ、みづから直にたづね給はゞ心服をおして聞給へ、さもなければ一とありにうけて心服を盡さず、又は遠慮もありて言葉を残す、そのまことをのべざればたづね給ふても益もなきなり。

一、人を用ゆるに誠ある人を第一とすべし。誠ある者はすゑくたのもしきものなり何ほど利口發明にて才知ありとも誠なき者には油斷あるべからず、しかれども才知ある者も又すつべからず、事を辨ずるには才知なければ辨じがたし、誠有る者を第一と

し才知ある者を次とすべし。

一、上に少なりとも利を好み給へば、下の役人才知ある者上の氣をとりうけて才知を以て利をたすくるゆへ、卑劣の事あるまじき事のみ出來て下民上をあなどりあざけるなり。かゝる者は政事の大なるあだなり。しかれども上の人誠をあつふし我をたて利をさくれば才知ある者又此氣をとりうけて義をたつるやうにとりはかる故、あたと成者かへつて政事のたすけとなる。しかれば上にある人つゝしみて利をさくべきなり。

一、質素に事をはぶくと利潤に心をつくるとは似たるやうにて大なる違あり。無益の費をはぶき美麗をこのまざるは質素なり利徳に心をよせてわづかの事にも物をふやさんとするは利なり。禮物を程よくくるは人をうやまひ事をおもんずる禮なり、華麗を好で人の目をおどろかすはをごりなり。

一、才智ありてよき人をば邪智ある者はきらふものなり。平生の事を辨ずるには正智も邪智もかくべつのちがひなき故人君かの邪智なる者のいふ事を聞入給へば、正智の

才徳あるものをしりぞけ給ふ事、唐日本ともに昔より多き事なり。是人君の智恵のうすき故なり。邪智なる者の人のさかえを云ふ事は年月を経てたくみにこしらへなす事も有り。急に手のひかれぬやうにしてさゝゆる事も有り。おほくは人君のこのむ所の氣をうけ、さらふ事の心をはかりて遠隔する事をもふけてさゝゆるなり。人君よく心をつけ給へばあやまちはなきなり。

一、學問をよくすればよろづの事は非邪正わかれ、下より訴る善惡人のさゝへにまどはず、訴狀願書などの文段の上にもをのづからその心ねまでしらるゝ事有り。此故に學問あつければ益おほく、淺くてもそれほどの益あり。然れども心誠ならねば私欲利勘之事に學才を用ゆる故學問かへつてあだとなりてむかしより學者のよからぬ人もおほきなり。年たけては學問のつとめ全くは成がたし。志あらばかなふものにてても古今歴代の事跡をみづからも見、人にもよませて聞くがよきなり。智恵は身にそなへてあれども磨かねばくらし。みがくといふは古き事どもを詮義してよさわろさを極めしり

聖人の書一勾二勾なりともたづね聞て義理をきはめしるは則知恵をみがくなり。

一、日本にては道とする事三筋あり、神道儒道佛道なり。正道なるは三筋ともに皆よきなり。師の邪曲なるは三ながら皆惡くとりなすなり。神道よりは儒佛をば外國のをしへなれば此國には用ゆまじき事とす。儒道よりも神佛は人まどはすあるまじきみちとす、佛道よりは神儒は世間にくらみて一大事をしらぬをろかなるをしへとす。皆をのく一すぢのしる所にかたよる故互にあだかたきの如くおもふ也。道の至れる所は三道ともに一つにおつれども、一すぢさへ得る事たやすからねば、三道を極むる事はかたきゆへ、一に落るきはまでをしる人はまれなり。むかし聖徳太子三道を鼎の三足に比して本邦に儒道を廣め、此國の人に唐の文字をよみ習せ給ふゆへ後の人儒佛の書をよむ事を得たり。先神のみちのあがむべき事をいはゞ、此國はもと神の築はじめ給ひ神の主し給ひて今にその御子孫を主上とあがめ、生るゝ所ある所領する地みな神の守り給ふ地なり。食物衣服を出す田畑のみのみな神のしわざなり。殊に人々生れく

る事父母の氣をうくれどもその時の天地の氣をもうくるゆへ此國の人はみな此國の神のしり給ふ所なり。神をうやまはざれば立がたし。儒道のをしへは五倫五常の道、天下國家を治るには儒道に過たるはなし。佛道は心事をおしゆる事佛道よりくはしきはなし心事をきはめしれば情にながれ欲に迷ふ事なき故道に至るのたすけおほし。こゝを以て聖皇^{聖徳太子}鼎の三足に比し給ひ、代々の帝王將軍家みな信仰し國家安全を祈り給へり。此國をおさめ給ふには三道ともにあがめ給ふべし。道を得ぬ儒者の不行議なると寺院社家の人まどはすなどはそのみちの咎にはあらざるなり。

一、世の人天道をおそるといふ事も有り。天子將軍家の威にもおされぬものは天道なり。これ孔子の罪を天に獲つれば禱るに所なしとのたまふ天の道なり。これを天理ともいふ、天理の降る所を天命ともいふ。儒佛神の道とは外のやうにおぼゆるは僻事なり。神中の神といひ理の躬の神といふ是なり。佛道にては法身の佛大日如來と云は是なり。天理にそむきては天道の罰をうくる、これみづからとるのつみにしてのがれが

たし、つゝしむべし。

一、弓馬劍術などは尤武家のたしなむべきわざなればいふに不^レ及。しかれども諸藝共にマへんにかたぶく時は、又政事をわすれ徳義を失ふに至る。習得て後はほどよきをよしとす。

一、風雅をよしとするは内につむ徳あつければその心ひろく體ゆたかなり。その氣從容としてせまらず其起居ふるまひこのむところする所みな風雅なり。詩歌管絃はみな從容不迫の意にして風雅の言葉に出で聲にうつるなり。このゆへに詩歌管絃を以て風雅のうはもりとす。いにしへの武士は風雅の心ありて武威につる。薩摩守忠度は軍中に歌を詠じて箴につく、源太景季は梅花を折て箴にさす、近代の太田道灌は鍵つけをうけながら辭世をよみて名を残す、かゝるいそがはしき間死生のさかひに武勇うすくしては風雅の氣あらめや。風雅をうしなはずして武威ますくつよし。たとへば鷹は勇猛の鳥なり、空中に舞事きはめて優なり。此優なる氣よりして勇猛のわざをなす

なり。風雅なるものはけやきわろさしゐてなす無理おしてもとむるやうの事まして残暴のあらきわざなどはなきものなり。しかれども一むきに風雅を用ゆればすゑに流て本をわすれ、實にうすき事のみおほく武毅もやはらかなるなり。何わざにても一へんなるはよからぬなり、猶心得べきなり。

一、世間に用らる茶湯といふものははるかに風雅のすへなるものなり。慈昭院殿物の結構にあきて寒微なる事をおもしろく思はれ、世捨人隠遁者のわざをまねられたりしよりおこれるなり。華麗を防ぐに便あり。今の世には風雅をしらぬ人おほければ、せめて茶湯にても風雅の氣を心得なばよろしかるべし。料理をすき道具をもてはやすくなりては又閑居隱遁の心にあらず。本を失ふてよからぬ事になりもてゆくなり。

一、學問をするに世俗の言葉に岸くづしと云としらげ米といふとの仕方あり。岸くづしといふは書物のはじめよりをのが心に得る程に一段づゝきはめゆくなり。岸をかたはしよりくづしゆくがごとし。これはてま入やうなれど一段づゝ極めゆく故さきに極

めたるちからをもて後にきはむる心得となりてかへつてはかゆくなり。しらげ米と云ふはこゝろには得ぬともとかくまつはかをやり、あれこれを習ておほくよむちからにて自然と理を得るを云。米をしらぐるにおほくの中の友ずれにてしらげらるゝ心なり。これははじめよりとくと心得る事なきゆへ後に習ふ事たりになる事なくて、こゝろ得る方にはてま入る也。諸藝の道もそのごとく、何にてもわがおもひよりたる方を一精出せば、一年ばかりのほどには大槩手に入ゆへ外の藝を習ふにその業はちがへども手に入わけを自然と心得て前に習ひたる所後のたりになる事有り。年たけて藝を習ふ者一品づゝ極めゆかんとすれば外の藝をくれになる事有り。たとへば弓馬劍術鑓長刀の類にてもかつて不調法成は當分事かけなる程に少づゝこゝろがくるうちにおもひ寄たる藝を一むき極めをくがよきなり。さもなければ藝能あまた習ひ覺ゆといへども一色も用にたつものなきなり。

一、道を得たる人は常に道に心有りて氣さしもすぐやかにやまひもうすく、外の慰は

求るにたらず、其以下の人は身をつゝしみ業をたしなむのみにては氣鬱を生じ、つとむる事も物うくなりゆく故、くるしからぬ遊びは氣をやしなふたすけと成べし。偏屈なるものは遊藝はすまじき事とのみ心うるはせまき事なり。一向に遊藝をやむれば、まざるゝ事なき故房事飽食にて日ををくり、大酒夜行は夜を明す小うた三味線などこそ丈夫の手に入物にはあらざるべし。能囃しなどは折しのないさめには害なからん。樂の琴笛などをたのしまんは猶さら古人の心にかなふべし。

一、親につかふまつる事は高位の人は志をやしなひ、卑賤の者は口腹をやしなふ。志をやしなふとは親の志とをばその志の立やうに心をつくすべし。親の好む所にしたがひ、さらふ事をさくべし。心をつくすとは眞實をつくすなり。

一、父は天のごとし、草木のその下にありて雨露の恵をうくるがごとし。父にあらざれば此身を立る事なし。母は地のごとし、草木の地にはらまれて生ずるがごとし。母にあらざれば此身をよするかたなし。此故に父をば天のごとくうやまふ敬の至りなり。

母は地のことくしたしきみいつくしむ愛のいたりなり。父母は血氣をうくるの本なり、したしき厚くして愛ふかし。このゆへに父には敬愛をならべつくす。惣じて孝のみちは理屈のなきものなり。たゞ和順を第一として眞實をつくすなり。もし父母のいかりにふればおそるゝ中にも猶さらに和順をうしなはずしてうけしたがふべし。をのれに道理有事をおもふべからず。

一、連枝はおなじく親の血氣をうくる者なり。親に次て連枝ほどしたしきはなし。生るゝに前後ある故したしき中に次第あるを以てみちとす。兄は弟をいつくしみ、弟は兄をうやまひいつくしむ。物領はことに父になぞらへてうやまひあつかるべし。常にたがひに心のへだてなからん事をおもふべし。

一、親の子ををしゆるに遠慮はなきなり。兄の弟をおもふにすこしづゝの事はたがひ有とも見ゆるしあるべし。さもなければ愛のみち立がたし。弟の兄につかゆるには何ほどの事有とも不足をおもふべからず。不足をおもへば不禮いで來て敬愛の道立がた

家
僕
教
訓

し。
右はうちおもひたるまゝの事どもをかたりまいらす、天下の事はひろし、一座の談話にはつくべきにあらず。

人として道にしたがはざるは人にあらず、臣として忠あらざるは臣にあらず、臣の君に忠あるとはたゞまのあたりしたがふをいふにあらず。内心眞實よりまことをつくすをいふ。わが身を君にまかせをき身をわが物とせず、手足のつゞくほど心のおよぶほど一筋につとめつかへて、かりそめにも二念をまじえぬをいふべし。二念をまじえぬとはたゞ一筋なり。かれこれとはかる心なきをいふ。但し一たんの事にのぞみては命をもすて、おや子の事をもかへり見ざる事はなりやすし。たゞつね／＼わたくしのころにひかれず、おのれにかち、きずいわがまゝのいづるをば是をいましめこらし、たとへばつとめしげくいとまなきとき、又は夜詰をしあかつきに起き、雨降風ふきあつささむさのとき、または供にいで使をつとめ又ははなはだ勞事しんらうしをなし、はなはだ氣つくしをせんに、すこしもあきいとふころいでは、これ則私なり。本より君にまいらせをきたる身なれば、わが苦勞を思ふべからず。常のつとめにはうへこゆる事ありとも命のをはるほどの事はなき物なり。命さへまかせおく君のためにはちからをいとふころあるべからずと、はや

くころづき、そのわたくしの心をくじくべし。是萬事にわたりてあけて言にいとまあらず。何事にもうつして心うべし。たゞしこれらの義いまだ忠のいたるきはめにあらずといへども、まづこのちかきところよりつとめいたらば遠ききはめおのづからうる事あるべし。しばらくもわするゝ事なかるべし。

おのれをつくすを忠といふ。心のまことなり。親子兄弟夫婦朋友の道皆この誠よりいで、外に法とするところなし。しかる中につゐて君につかゆるをのみこの忠の字を用ゆる事はれなきにあらず。君臣は義を以てあふ。上下分を異にして、君はいきほひさかなり、臣はいきほひ微なり。この故におほくはまのあたりしたがふて内心眞實よりいづる事まれなり。もし眞實にいでずば、且夕ちからをつくし晝夜氣をついやしおよび一命をすつともこれを忠とせず。忠は心の誠なり。ころの誠よりいで、すところみな忠なり。そのおほくうしなひやすきについて君に誠あるを忠といへり。およそ善をつとめあくをさくるといふかほどおろかなるものもみなしるところなり。

故に外人のみる所には善をいつはり、うち人のみぬ所にはあくをほしひまゝにするは
 愚人の情なり。人にいつはるを他人にたいしてしつのまゝにせざるなり。人をあざむくとし、われとわが心をい
 つはるを心にはよしとおもへどおこなはず。こゝろみづからあざむくといふ。誠の害をなす事
 これより甚だしきはなし。若誠をうしなへば、子として孝あらず、臣として忠あらず
 ことごとく天道の理にそむきて人の人たる所をうしなふなり。よくつとめていみさく
 べし。それ誠のかたちたる事内外表裏一まひにして少しもいつはりなし。たとへば外
 にある所内にあるものと一まひにしてかはりなし外とは事わざにわたりたる所をいふ。内とはこゝろに思ふ所をいふ。一まひにしてかわりなし
とは事と心と一ま今いふ所後にいふ所と一まひにしてたがひなし。言葉のうへにいつ君の前
 にする所私の所にいとなむと一まひにしてたがひなし。これは君の前とわれひとりとの所に
いて事をなすにまことなるをいふ。
 君にいふところ心の實を一まひにしてたがひなし。これは君にいふ所まことなる
なり。こと葉のうへをいふ。人の見聞所
 にかはりなす事心の實にあはずんば、外善にして内不善なり。これよりして前の文をさかし
まにとひてそのいましめを言
人の見きく所をはつゝしみてよき事をなすは外善なり。心
の實はかへつてよき事をこのます。これうち不善なり。そのうちをいまして心の實をつとむべ

し。心におこれどもこれを外につとむるにうちおこたらば、是うち善にして外不善な
 り。心のうちにはよき事おこれども、外のわきにはよき
事をいとひあきてせざるは内善にして外不善なり。外をはげまして内の實にあはしむべし。
 すべて君の前にする所かけになす所、いまいふ所後にはかる事みな一まひにしてたが
 ひなからん事を思ふべし。これたゞ君につかゆる道のみにあらず、親子兄弟夫婦朋友
 の道みな此心なるべし。およそ人の道みな心の實にいづるといへども氣しつのおほは
 れおほき、むまれつきのわろき氣たてにより
よき事をいやに思ひてせぬなり。人欲のおほはれあつきわたくしのこゝろよりおこりて
身のためにはかる事をいふ。
 外物にひかれやすきみるものきくものにつき
てうつるこゝろをいふ。習俗のけがれふかきわろきならはしにそみ
なれきたるをいふ。をしる
 にしたがひその道にこゝろさらすは害をまぬかれて氣しつ人欲など
のかひなり。道に至る事あるべか
 らず。是又したがひ心ざしありともこれをしらすんば、何にかしたがひ、なにゝか心
 ざらん。此故にまづまなびてその道をしり知て是に心ざしつとめて實に至るべし。わ
 が國にもしなくのをしへありといへども、今世におこなわれず。日本にも教の書ありと
いへども今は皆神職の
秘義物となりて世上にあまね
くならはしまなばぬをいふ。かるがゆへに今道をまなぶもの皆孔子の道にしたがふ。是華異

華とは中國をいふ異 相通じ古今一貫せる常道なり。 いにしへにもいまにもおしわたりて 四書五經 とはるびすをいふ。

近思錄史記左傳古文文選の類よみならふべし。 史記左傳は文字をもしりまたいにしへのよしあしををしりていまのかんがへとなすなり。古文文選を

よめば文字のはたらきいてき しかれどもつとめのいとまなくして廣く義理を求めんとせば、

かならずそのくはしきに至るべからず。諸經おほしといへども、四書をきはめばその

餘はをのづから心うべし。故にまづ四書にちからを用ゆべし。小學常にならひてわが

つとめの規範とのりてはん のころ。すべし。をよそ書をみる中わきびらに心をわたさず一むきに

心ざし、逐一に 一句々々一段々々に一つ その義理を求むべし。 通鑑細目大學衍義などは政にあづ

す見べき 古書につとむるかたちを俛焉といふ。一むきにころざしてわきへ心をうつさ

ぬをいへり。前の段をあきらめずは後の段にころをうつすことなかれ。この章をさわ

めずば次の章にうつるべからず。一段のうちにも一句く心に心をつけて心におちずば

いつまでもその所を見るべし。ころうつくとして何どもみても義理のひらけざるは

心の一むきにはまりなくころざしの一すじにいたらざるゆへなり。必心をはげまし

ふるひおこして氣を一にして深く求べし。をのづから義理を得る事あるべし。天下不

是底の者なし。 天下にあらゆる人はみな天地の理をえてむまる むまれつきのたらはぬをいふ事

なかれ。 氣しつわろきは人にすぐれてたゞちからのたらはぬをいふべし。 氣しつなをらぬはつと

つとむればあらたまるなり。 求めてえざるの理なし。つとめていたらざるの道なし。書を見るには重疊の心

得あり。およそ書をのする事或は全體をいひ、或は一へんをいひ、或は衆人のためにし

あるひは一人のためにし、或は理を説あり或は事をとく有り。時に古今あり國に大小

有り。 唐は大きく日本は小ならはしに同異あり 唐と日本と風俗にちがひたるとおなじきと有り。日本のう

さきたぐいなり。 ちにもみやこといなかとははやちがひあり。都の風にあふ

てもいなかにてはその國のなら 若ことくく書を用ひんとせば、わが神慮にたがひかへつて

はしにしたがふをよしとす。 聖人の本意をうしなはん その國のならはしにしたが 用捨の義今略是を論ぜん。蓋し人はか

はり形はちがひならはしはことなれども心に差別なし。堯舜よりこのかた列聖相うく

る心法今日人心におゐて毫釐もたがひなきものなり。故に心法の修行かならず聖賢の

言にしたがひ品をこえず序をおふてその至極にすゝみいたるべし。或は氣質の偏をい

ましめて一人のためにとけるをばおのれこのうれひあらば、これを以てみづからいましめとせば人にこのうれひあらば是を以て人のいましめとせよ一人のためにとけるとはたとへば子遊に孝をおしへ給ふに敬せよとの給ひ子夏に孝をおしへ給ふには色をおんくわにせよ 國はちがひ時はことなれどもおなじくみな人の道なり。事は萬變にわたりて品々のわかれあれども理は皆一なり。たとへば冠婚喪祭冠はかむりをはじめてきる禮なり。是を元服と言ふ。婚はよめとる禮なり。喪はしたしきものののまかりて服をきるをいふ。祭は唐にては時々先祖を祭り又は山川五祀などの祭なり。のごとき今皆こゝに用ひられず。心のおしへはひとしく昔人の道なるゆへいづくにもおしわたりて用ひらるゝなり。事はしなぐにはかるゝゆへかならずしも用ひられず 理におひてはちかふたる事のうへにある理もかならず時の制法にしたがひて異國の法をたつる事一なるゆへことごとく用ひらるるなり。 なかれ。若是を用ひんとせば時の制法にたがひいたづらにその身をはづかしめ道の大體をうしなわん。天下の權にあらざれば權とは天下のしをきき 禮をあらためず、是則聖人の教なり。聖人の禮法にあらざれども時の定りなる法にしたがふをよしとす。 しかれども理に差別なきゆへこれをまなぶときはおのづからそのよろしきを得る事有。聖人のさだめ給ふ禮の法今此國にことごとく用ひられねども理は一なるゆへならへば此國に用ひらるゝよろしき所をうるなり。 たとへば天子諸侯大夫士庶人をのゝ分限にわかれあるを見ては今日當前におゐても

貴賤高下品々のわかれあるべき事をしり喪祭の禮におゐて俎豆を唐にては祭の時用ゆるうつは物なり。穀肉の類ひをもる物 づらね禮容をもうけ裏麻を喪にゐる時き 服し、苦にとまとは喪にゐるといぬるの類なり。 づらね禮容をもうけ裏麻を喪にゐる時き 服し、苦にとまとは喪にゐるといぬるの類 を見ては神をあがめ、先祖を重じしたひ祭の事にあたるなり。 死を悲ひし終をゆるがせにすまじき事をしり、喪をつとむる事にあたるなり。 およひ父母兄長につかゆるの法夫妻室におり嫡妾嫡は本妻妾はそばめ 序あるたぐひに至るまでみなその理ある事をさとり、時世の法に合せてそのよろしきを分別すべし。事々皆至善のよろしきあり、本はたゞ一箇の誠よりいづ。その誠いたらばをのづからそれゝの可にあたるべし。しかれどもをのれにあるの明ちるのこ いただあきらかならざれば、その理を見るにくらし。その氣しつゝいまだ變ぜざれば是を用ゆる事あたらす。故に理にくはしく國の風をしれるものにつゐてそのよろしきを尋べし。をしへもまた術おほく畢竟身をおさむるを本とす。みづからおさむるの要たゞ敬の一字にあり。その獨におゐてはちからを用るべし。他人のしらぬ所をよくつゝし それ禮は人の規矩也規矩は方圓の法となる器なり。これによそへて人 是にしたがへば道存し、是にそむけ

ば道ほろぶ。その大體をかたるときは則君臣父子夫婦兄弟朋友の序なり。その小義をかたるときは則進退揖遜動作語默の際なり。蓋し大體は本なり、小義はすゑなり。小義にかゝはりて大體をうしなふべからず。また大體に執して執はとりとどこほることろ小儀をわするべからず。大體はすなわち小儀のいづる所、小儀は則大體をたつるゆへんなり。その本末輕重ありといへどもかたぐすつべからず。故に既に命して學問によらしむ。本に志してその道をつくせとなり。今又令して威儀をならはしむ。時の禮にしたがふてそのこゝろざしをはなたざれとなり。また是日用跣歩の實用なり。日用とは常住にすることをいふ。跣歩とは足を一つあくるにもといふこゝろにて何事にもはなれざる入用なり。あへてゆるがせにすることなかるべし。

治教略論と老話は享保十八年の頃萬松院様の御作文にして兩上様へ被_レ獻のよし。鳥の音は享保十六年の頃御作にて、瑞春院様へ被_レ獻候よし。その後鳥の音を五山派の金地院に御見せ被_レ成候之所甚感心の上寫置人々にも見せたまよしのぞみ申されしに、御

答にかやうのもの祕し申さん事にはなく候へども、是はさる事ありて貴婦人御得心のため獻し候とて編集候へば、他見の事ゆるしがたし。貴僧は格別の御事ゆへ一覽候へとの事に候とおしせ有て、書寫の事御ゆるしなし。又その頃黄檗派の伏見佛國寺ねがひにて拜見御ゆるしの處、佛國寺申は御作意のたうとき事たとへをとるにものなし。されどかほどまで諸宗の事はことごとく御書のせ、何とて我等の宗旨をば御のこし候やと申上、且又書寫のねがひなり。御答にはそのの宗旨は何にの譯ゆへ御のぞき有しとて、つぶさにおしせ含られ、寫の事は御ゆるしなし。右の通ゆへ我等ごとき者中へ拜見事おもひもよらず、書寫の事は勿論なり。治教と老話はなをもての事に候。その後譯ありて或人右の三集共に寫し置しをふかくのぞむといへどもゆるし給はず。我等の望は他見の事はいふにおよばず候。たゞねがふ所は子孫に傳へん事をおもへばなり。世間に大儒おしくして色々の書物をつくるといへど、善惡をわかちさとさんとてか他を誇り人をなじる。然るに此御作文はさやうの事なくしてをのづから善惡分明

なり。世俗に小松の内府重盛公と楠正成に萬松院様をあわせて和國三賢人といふよし、何をもて人々尊敬すると云ふ事かやうの御書物をも残し置なば年へても御達徳の實なる事を知るべし。このゆへにふかくのぞむよし申せばもだしがたくやゆるしたまひぬ。家僕教訓は元祿の初め御作の由聞及しに是もことし或人に借りて年來の望この時にたりぬ。本より他の人に見すべき書ならねばとて、硯をならしかなはぬ筆をとりて書寫し置ものなりあなかしこ。他見の事簡あるべき事に候なり。

元文三年未中秋

藤原泰貫寫之

鳥の音

をのづからなりゆく山ずみに鹿のなくねましらのわたるなどもさみしき中の友とおぼへいまだ都の空うとましくおぼしめしなりぬ。小原のさよ風木の下露しげくひるとなくよるとなき念數の隙には、大納言の局阿波の内侍などぞ御前に侍りて、こしかたのはかなき有さまかたりいで、なきみわらひみなぐさめ奉れど、たれくも心ぼそきのみぞやるかたなき。大納言の局いざりよりて啓しけるは、「まことに天下の國母たる御身には何事につきても世にたらはぬ事なくいつきかしづかれ、めでたき御事は上なき限みをうけつくしたまへれば、今は何かはせん。たゞ後の御すくせこそもとめたまはんなれ。かゝる哀なる御ありさまにみなし奉るはかなしけれど、佛の道に入給ひぬるこそあらまほしき事におもひ侍る。さても嗟峨のおくにおこなひすましておわすなるなにがしの大とこは、みづからとをきゆかりありてしる事侍るが、いとたうとき大徳のよし、人々たうとみ侍る。さる事ありて、此ちかさわたりに出おはすなるをしやうじ奉り、御をしへをもうけ給ひなんや」と申せば、きこしめして、「それこそあ

なれ、ねんごろに聞えてしやうじ奉りてよ」とのたまへば、大納言の局あないしておはしぬ。大徳もあはれに見奉り、「人の世にありてはねがはしき事は富と貴となり、富は四海の内をおさめ、たうとき事は天皇にすぐるはなし。御まへには國母の御身にていまかくあさましき御すまいを見奉るもあわれになむ。されどかゝる御事も前の世の御すくせとおぼしめせ。この世の事は夢の間にて侍るを、ながき淨土にいたらんとなにかしこき人はねがひ侍る。大聖釋尊は王宮のたかき家をいで、ひじりの仙人のためにとたきこり、なつみ水くみつかへ給ひてこそ佛の道をば成じ給ひぬれ。御まへにも王宮のみやびやかなるを出で、さびしき山すみし給ふこそいたましき御事ながら、佛のみちにはそれこそよき善智識ならめ。」大納言の局うけ給はりて「御まへにも今はひたすら佛の道に御心さしおはしませとおしへまいらす師家もましまさねば、たゞ明くれ香花を供養する御つとめの外はわきまへしろしめす事もなく、御しめしをもうけ給はんとて請じまいらすれば、ありがたき御事どもをしへまいらせ給ふべくや」と

申せば、大徳ほゝゑみて「まことにめでたき御心ざしならんかし。佛の道とて外なる事はさらになし。つねとして御心にとゞまる所なく、人をあはれみ給はなむこれ佛の道にて侍り。あなかしこ、外さまにむきて道をもとめ給ふ事あるまじき事に侍る。」「局まことにありがたき御をしへなるべし。なをくはしき御こゝろをきてをもすゝめさこゑ給へかし。」大徳「たゞまづやすらかなる事をおぼしめせ、佛の道は天よりもたかく海よりもふかし。つくさまくすとも言葉にもかよふべからず、その大むねをきこしめしをき給へ。まづ御みづからの御心をしろしめさん事かたき事のやすき御事なり。佛の心衆生の心みづからの心と此三つ一つにて、みづからをすればいづかたもくらからず侍る。その心のすがたは色もなくかたちもなくむなしき空をみるがごとくなり。そのうちに陰陽五行は云ふに不及、萬物のいきとしいけるもの、精靈木草石金やうの精神までもことごとくくみたくはへて萬法歴然たるすがたなり。その靈物は微妙のさかひなる故音もなく香もなし。たゞ空とみるより外はなきなり。この空世界に彌まして、

大にしては河海山岳小にしては砂石塵芥および金山鐵壁の中までも入はせりみてずといふ事なく、をのれにあらずといふことなし。この位を佛心とも菩提心とも申す。されば佛は外にあらずみづから即ち佛なり。これを眞言には即身即佛ともいふなり。天台の一心三觀一念三千の法門、華嚴の無碍圓融の法もすこしづゝのわかちをたつれどおなしおもむきなり。次に法相宗の三界唯心萬法唯識、三論宗の八不中道などいふもみな諸法を説てもはら心を主とす。たゞ心法をさとり知らむ事佛道を得るの肝要にして又ちかきみちすぢなり。傳教大師もろこしより天台眞言禪法の三宗を傳へ來り給ひて天台眞言の法をば叡山に傳へて兼學の山となし給ふ。其後弘法大師唐の惠杲阿闍梨に眞言をくはしく傳へてその法ますゝさかんなり。禪法は傳へ得たる人もあらぬにや今はその聞え侍らず、そもく心寂靜を極めぬれば、住する所なくして何事にわたりてもその事きわめて實なり。たとへばあきらかなる鏡にはうつる影まことなるがごとし。事毎にまことなるこれみちの至りなり。心むなしくて實の至れると事毎に執をと

どむるとははるかにことなるわかちなり。この故に父母に孝あるものは子の事をおもわず、主君につかへては身の事をかへり見ず、ゆくもとどまるも取るもすつるもことごと無我に出てとどこほりある事なし。かくすれば心のうごき清らかに、事にわたりてあるべきやうにして、内の真空なるものとおなじみちなり。」

局ありがたく聞うけて又とひ奉る。「心空なれば物なし。その事毎に誠あるはなき所よりいづるなり。何ものありてか、その誠をいたすならん。」大徳「これよき心づきなり。はじめに啓せしごとく、心空なる故に物さゆる事なく、萬象をこめ、萬物萬事のことほり内に具る。そのそなはる物みな微妙の眞理なるゆへ色形なくして空なり。空といへばとて何もなきむなしき事のみをいふにはあらず。内に衆理萬象をそなふゆへ事にわたるにたらはぬ所なく、内よりいでざる物なきなり。萬物を含み貯ふる所よりおこるをすべていへば大慈悲心也。是佛菩薩の御心なり。なをたよりに就ていへば、慈悲はすなはち愛なり、愛には七情を兼たり、喜怒哀懼愛惡欲これを七情と名づく。

愛にかなふものを喜び、愛にたがふを怒り、愛するものうれへを哀ひ、愛にいたみあるをおそれ、愛をすつるを惡み、愛してこのむ所を欲す。つがぬれば愛情に出で、わかれては七情となる。この故に大慈悲は全體よりおこる心なり。大乘の前には世間も則法の中なり。世間の外に法もなく、わが身をすてし道をもとむる事は佛のみちにはまことはなき事なり。教に世間をすつる事は執をとどめざらん事をおもふてなり。たゞ煩惱妄執といふものはらひがたきゆへ、乞食頭陀の行をなしてつとめ侍るぞ、今の靜なる山すみにおはしますこそ世間に執なからんためにいと幸ならめ。」局「御前にはむかしの御世にかへらん事はともなき事なれば、ひたすら道心の御心ざしありて佛の御前に香花を供養し給ふ御いとま、われ／＼御前に參り、おのがどちのむかし今のある事、すぎてなき事をもかたりなくさむを聞しめし、かりそめにも人の悦ぶ事をば御心よくうちゑみおはしまし。かたきのすゑにも人のいたむ事などはうれへ思召す。世の外なる御すまゐなれば、世の中には御心とどまる事もおはしまさぬにや。」大

徳「これいととうとき御事なり、世に執なく御心きよくて人をあわれみ給ふこそ則佛の御心にてさぶらへ、執なければ本よりありのまゝにして心あきらかなり、人のあわれみをおぼしめすは本心よりおこる所にて、佛菩薩の御心にたがわねば佛法とて外なる事もなし。たゞその御心をきてにて道をば成就し給ひてん。御みづから則佛なる事をしろしめせ、妄念のふせぎには陀羅尼を行し念佛し給はんこそいとよき御事ならぬ。」

阿波の内侍は信西がむすめなればこざかしく申す。「人は陰陽五行の合とはなるゝとに生死の道わかれて、此世をさるは陰陽のわかるゝ故也。みたまさりては天地に歸してもとの陰陽五行にうちまじはれば、此世の外に世界もなく、輪廻といふ事もなく、後世の成佛をねがふべきよくもあらぬとおしゆるゝものあるはいかゞこゝろへ侍らむ。」

大徳「それは儒家のおしゑにあれ、むかし聖人の人ををしゆる事、ちかく用ゆるところをしめし給へば、生死の道をばつぶさにのべたまわざるにや。されば聖人の御心ははかりがたし。後のをしへにしたがふものは聖人ときあらはし給はぬ所をばなき事と

こゝろふるなり人の靈神は煮ても焼てもつきぬものなり。死すれば氣にひかれて天堂に至り、地下にしづむはみなこの世にておもふ所なす事内に薫習してその氣のひく所にしたがふなり生て三綱五常をたつれば死て悪趣には至らず、されば聖人のおしゑは生て道のたゞしからん事をしめし給ひぬ。師家によりて浄土もなく地獄もなしといふはこの世にすなはち浄土も地獄もある事をしめしてなり。まことになしとおもふは又僻事なり。地獄といへど地の底に世界あるにもあらず、此世界のごとくなれど、この地面よりはるかにひきくていとかなしき世界を地獄と名づく。佛菩薩のすみ給ふ所を浄土と云ふ。此世をつくせば薫習する所にひかれ、同氣相もとめて、みづからとそれどれのならむ所に至る。この故に後世の修行はみづから心をしりあきらむるを第一の事とす。佛を造り僧を供養し伽藍を建などするはそれもさる事なれど次々にして功德うすきなり。身をはれば靈神とともに消はつるなどこゝろへなば、いとおろかなる事に侍る。儒家の心をおしゆるには中庸に過たるはなし。是子思聖人の見孫にして大聖

孔子のみこゝろおきてをちかくみきしてしるしおき給ふなれば、いととうとき事どもなり。中にも上天之載無聲無臭といふ是則中心に萬象をそなへたる有様微妙のさかひにして空洞の至り明々歴々無聲無臭なり。こゝをもてみれば聖人の教も佛の道もそのもとは一にして差別なきなり。仁心には萬物含藏し愛情を以て天下を治む。後の學者はつとめて佛を破るゆへ佛道とたがひある所をたてんとしてその道外さまになりゆくなり。こゝろへ給へ。」局またとひ奉る。「あめつちにみちひろごり石金の中にもゆきわたる心はいかなるにか侍る。」大とこ「されば萬物の天地の間に生をうくるみな五大のしわざなり。五大とは地水火風空なり、五行の水火木金土といふもおなじものなり。此地水火風空天地の間にみちひろごりいたらざる所もなし、人も地水火風空鳥けだものも地水火風空草木石金の類までも皆この五大にて成立したる物なり。をろかなるものは虚空は空にして何もなしとみれば、この五大空中に入はまりてすきひまなきものぞとよ、冬の日物の隙より日影のさすにはいきのかけちら／＼とみゆるものぞ、これ

をもて五大の空中にみてる事をしり給へ。たとへば家はわづかなる火あれば屋の上の雪はやく消、水のほとりの臺には水氣の濕をうく、あたたかにおぼえひや／＼かにしれども、火の色水の色はみへざるがごとし。石金のうち實にして密合すれども氣の融通ある事は石の上に木草を生じ金の内へ温冷の氣をうくるがごとし。たとへばから竹の木目に髪の毛をとをし、かしの木をもてしたる銚の柄に息をふけば二間あまりを過てその息とをりゆくがごとし。密合すとみゑても氣の融通する事かくのごとし。是しりやすき所をもていふ。これをもて空中に萬象みちはまる事知るべし。又その微妙の體は空となづくるにさまたげなし。心中の空なるも又おなじ。この故しばらく心の空なる事をしれば、虚空とへだてなき事をさとり、わが心たちまち天地にゆきわたり萬物に融通する事を得てあくまで修行をかさぬれば、天地をも領してわが度内にをき萬物をおさめて一心にあり。こゝにおいて數々のうたがひ一度にとけもろ／＼のおそれくするしみみなうせてつねにやすらかなる事たとへをいふに物なし。是たゞわづかに知解

の身をうるといへども世の中のくるしみはなきものぞとよ。」

又問「佛の御前に念珠し侍るに他念なからん事を思へど、妄念やみがたきをばいか
がし侍らん。」答「妄念のおこるをやめんとすればいやましにおこる物ぞ。妄念のやま
ひにはつかぬを薬とす。たとへ妄念おこれども本の心にそみつく物にあらず。妄念の
おこる中にもその本心ははなれざるゆへ、本心にかへればたちまち妄念は消るなり。
心一むきに禪定に至りて餘念のまじはらぬを三昧に入と云。修行まだしき間には三昧
を得る事はかたき事なり。」問「本心にかへるとはいかゞ。」答「本心はすなはち眞如の
體なり。はじめにいふ。萬物萬象をそなへたる物にしてしかも微妙の體なる故空洞無
我なるものと知るべし。妄念のおこる中にこの本心はなれざる事をするは即妄念を拂
ひ本心にかへるの術なり。かゝる心おきて本不生の義をこゝろへぬればやすらかに自
由を得るに至るなり。本不生とは本より有のまゝにしてさらに今生するにあらずとい
ふ義なり。わが身わがみたまは過去久遠の昔よりこのかた有物なり。衆生の六道輪廻

して、こゝに死しかしこにむまるゝといへども、をのゝもとより十界十如萬物萬象を
そなへたるものなれば、かりにあらはれかりにかくるゝなり。こゝにあらはれてはか
しこにかくれ、かしこにあらはるればこゝにかくる。いはんや輪廻の身はおもふ所な
す事薰習してその形すでに心のうちにつくりなし、佛菩薩に至るも幾世のほどにその
たねを生じその果を得る。そのつくりなしそのたねを生ずといふものもみな本よりそ
なへたる中に出で、本あるものゝあらはるゝにより本不生といふなり。十界の中に菩
薩より下の九界はかりの境なり。佛を實の境とす。これを天台にをしゆるに十界十如
權實の法といひ五百界千如ともいへり。はじめにこゝろへやすからんにとおもへば、
こゝのはしかしこのつまに諸宗のこと葉を引ましゑて申侍る。又因縁生故無自性とお
しゆるはおとれるかたにさたし侍る。たとへばはかなき器やうの物にていへば扇はほ
ねをたねとし紙をたすけとして扇を生ず。扇にもと自性なしといふ。拂子は毛すしを
たねとし木の柄のたすけを以て拂子を生ず。拂子にもと自性はなき物と云がごとし。

扇はほねに扇の性あり、紙にもと扇となるべきことは有り。拂子もおなじ。衆生はもとより佛となるの性あり、法をたねとし修行をたすけとしてはじめて佛經を得ることはりにはあらずたゞ一すぢに御みづから佛なる事かへすくしろしめせ。」問「佛を實の境としめし給ふは御經に如實知見と説給ふもおなじ心得に侍るにや。」答「大日經に如實知見自心とあり、法華經には如實知見三界の相と説けり。おなじ教なり。如實とは佛のごとくにといふ義なり。おのれを凡夫とへだて、佛は外に有ごとくおもふは如實にはあらず。さきにいふごとく九界は權なり佛界は實なり。おのれはこれ佛なりとしるを如實とは説るなり。三界の相を知見すと説るも又おなじ。さて佛の心みづからの心へだてなき事のいかなれば、心の本體佛の心に毛すぢほどもたがはぬなり。そのたがはぬ心はさきにつぶさにしめすごときぞ。この心衆理萬象をそなへて法界に周遍し石金の中までも入はまりてみてるものなり。かく周遍するわが心天地の間へ心をはこび石金の中へも心をそへてゆきわたるにはあらず。六大無碍の境に入ればおのづか

ら此こゝろ天地にみちひろぐる事を知るべし。孟子の浩然の氣天地の間に充塞すといへるも、五行の充塞しておのれと一體なる事をよくしれるものなり。是を佛心といひわが本心と云。このことわりをさとり知るを如實知見とは説るなり。」

問「一佛心法界に周遍してみなもてわが心なりとせば、他佛の周遍する所およびわれらごときさとり得て如實知見すとも周遍すべき所なく領すべきものもなきが如しいか。」答「重々帝網といふ事よきたとへなり。天帝の宮殿にかくる玉の網あり。數百の珠をもてつくれるあみなり。數々の玉のかけあいてらして一つの玉の中にかゞやき、一つの玉の光りかゞやきて數々の玉にうつるがごとし。佛心の様界に周遍するも又同じ。一つの玉の影數々にうつるはこの心法界に周遍して萬物に入はまるにたとへ、數々の玉のかけ一つの玉の中にかゞやくは萬物萬象を心の中におさめたるに同じ。諸佛をのく主とする所有てあまねくてらす事玉のかけのたがひにうつるふが如し。かく融通する中にをのく又分理して一つ一つの玉のすがたわかれて相混せず。きわめて

いへば、みちはたゞこの周徧するものと分理するもの二つにとゞまるなり。この二つはたがひにおもてうらをなして相はなれず、周徧するものそれ／＼のことはりにつきて分理し、分理せしものよりしてあまねく融通す。ちかくさとしいはゞ、こゝに成徳の人あらんに、その愛天下の萬民にあまねく融す。その中の親子兄弟はむつまじく、高貴には敬ひ、賤卑には程よくし、徳をばとうとび、暴をばいましむ、是融通の中において分理するなり。分理のかたよりいはゞ、おのれ／＼みな天地の徳をそなへ得たり。これ分理なり。そのそれ／＼の中よりあまねく萬民に愛を施す。これ分理の中より融通するなり佛の心法界に周徧して衆生のもとむる所に應じて利益を施し給ひ、六大法界に周徧して萬物萬象にわかれあるも又おなじ。是理智の二つに出るなり。」

問「眞如とはいかゞ」ことふ、「眞如とは諸法の本體なり。是をあぢはふにはわが心にてさとすべし。まことのことはり心中にみち一身にあまねく法界にひろがり庶物に入わたる。みな微妙のことはりなるゆへ色もなく形もなし。佛菩薩のごときまことの至

り物／＼にみちわたれるをあきらかにみそなはしてこれを眞如との給へり。微妙のさかひをしらざるものはたゞ空無とのみおもへり。内にみつるに品／＼あり。執をとゞむるはいふにおよばずあるは心のよるところについて内につみ、藝業にてもこのむ所をつみかさね、あるは仁義のみち又は斷見常見の修行あるものふかく工夫をこらすの類内に實なきにしもあらねど、つむ所一むきにしてあらしきなり。微妙のさかひに至り萬法をつくせるごときにはあらず。たとへば一つの器に石瓦のごときものを十分に入れみつれば實有といはんすれども、すきひまおほく有て實の實にはあらず。その石瓦を細抹して器中みつればすきひまなくして實の實なり。そのごとく内にみつるもの微妙のことわりなるゆへ、大にしては天地にみち小にしては毛穴の間にもそなはれり。これ眞の眞にしてこれを眞如といへり。とゞこほるものあればその一科にとゞまりて眞如の體をくらすなり。元より眞如の體はをのれ／＼心をそへて作り出たるにもあらず、修治行力をもて求め得たるにもあらず、わが天性とむまれ得たる性理なり。ま

ことに是有がたきえにしなるべし。しかるに煩惱の網にかゝり妄執の雲にさへられて邪路におち入るはみなこのむ所にそみつらなり。その邪路にゆくと如法の氣だてとて二つはあらず。此身にひかれなじみにしたがふは氣のくせにて、おぼへず正道をうしなふぞくせといへどこれまた氣にそなへたる徳なり。」

問「世にあるものは世間をすてはあられず、世の中にまじはればをのづから眞如法心にそむく。いかゞ心得侍らん。」答「諸法本不生なることはりをすれば、心の體に諸法そなはりてあまりなき事を知る。心に諸法そなはれりとなれば、これ微妙のさかひにて色形にわたらざる事をさとり、空無のすがたをすれば、心に一物もあらざる所これ大慈悲心の全體なりと知るべし。此全體よりあまねくそれ〴〵の事業に應じてもるゝ所なし。不動愛染の降魔のすがた怨敵退散國家鎮護の大威勢力もこと〴〵大慈悲の全體空無の心より出来るなり。人間の五倫禮樂六藝のみち茶のみ物たうべなどするもたくはへなき無我無心の體よりいでつけそふる心なければみな佛心にたがふ事

なし。空無の全體と色有の應用とも二つあるにあらず。あなかしこ。うたがひあるべからず。」

局又問。「われらごときものかゝるふしぎのえにしをもてあいがたき御法をきゝうくるこそありがたけれ。されどたしかに心うる事はいとかたくや侍らん。この日ごろ或念佛せよとをしゆるもあり、あるはだらにをとなへよ法華をよめなど、とり〴〵にすゝむるものゝあるをばいづれにか心よせ侍らん。」大とこ「佛の法おほいにわかつに大乘小乗の二つなり。大乘は大根大機の人にやくして一佛性の義を説けり。その中に眞言天台華嚴を三大乗とす。しばらくその宗の一二をつまみいふに、天台宗の教は一心三觀を立て中道實相のこゝろをさとり、一念三千といふは一念頭に三千の世間をぐそくせりと觀す。この觀をもて一切におよぼして峯の嵐の谷の水の音一色一香の中道にあらずといふ事なし。こゝをもて諸法はみな實相なりとをしゆ。華嚴宗の教は無碍圓融とたてゝ佛知見の前には一味平等にして自在無碍なり。この所を空といふ。此空至

極微妙にして空のまゝにして萬法歷然たり。たとへば大海の水平湛なる所をみればたゞ一面にして空のごとし。千波萬浪おこるは萬法差別の色なり。しかも波のまゝにしてまたく、水水のまゝにして全く、波や波と水とたがひある事なし。これを色卽是空、空卽是色といふなり。眞言宗のこゝろは諸法本不生と立て、理知圓融し法界を一心とし、一心に法界をおさめて、世間の事皆法にあらざる事なく佛心に外なる物なし。事をもて主とすといへど事に卽する理なるゆへ事理一圓なり。欲觸愛慢は法の中なるに より煩惱卽菩提なり。八識は身中の事なる故心數心王我にあり。かくかたはしを言ては甚深の義つくしがたし。眞言宗には三大乗の義次第をたてゝいへど、をのゝ機に隨ふ者信受してその門に入る。いづれをゑらびさくべきにあらず。宗旨はすゑにわかるゝににたれど、三大乗をのゝ佛在世よりのありものなり。その機に應ずるものその教をうけて佛果を證す。たとへば藥の益氣湯を用て相應ずるやまひには益氣湯にて平癒す。六君子湯にて相應じ歸脾湯にて相應ずる病にはをのゝ相應ずる所を用て病

を治す。六君子湯歸脾湯に應ずる病には益氣湯上品の能ありといへどその神功をほどこす事あたはず。法も又かくのごとし。をのゝうくる所機あるをもて佛果をなす。このゆへに佛在世より此法三ながらそなわりていまに至り日月のごとく世にさかんなり。小乗のをしへといへどその機の應ずる所あればいみさるべきにあらず。御前には御心をきてたかく清らかにおはしませば、ひとへに向上の一路をしめし奉るぞ。されど佛の道はさかしくましますともいとえがたき物に侍る。なを信心こそあらまほしけれ。はじめをなしおはりをきわめて初發心より成就に至るまで信心の一すぢにてとけゆくなり。信心は本より眞實の心に出てその高きをきわめ廣きをつくせば、すなはち眞如の體となる。おろかにいやしきうへにも相應のまことはあるものぞ。されば世中の眞實になす事はみな佛の道にたがわず。われはおろかなりとすてゝ佛の道を外にするこそうたてけれ。おろかなれども信心ふかければ起居につけて佛の道をわすれず。だらにを業とし念佛を所作とすその功德すくなからず。だらには光明眞言を最上の眞

言とす。經に曰く、もし衆生ありて十惡五逆四重の罪あらんに此眞言を唱ふればたちまちに滅除す。儀軌にいはいはく、もろくの苦惱災惡をうけんこの眞言を聞て受持せば無量の苦惱災惡を滅除し福壽を増長して安穩快樂を蒙らん。若一切の衆生この光明眞言を聞事を得ば、かならず無始已來輪廻の生死重罪を滅除し如來の界會に入る事を得て、現前に無量無邊の福德を増長する事を得ると説り。又此眞言誦持して一遍を誦すれば百億無量の大乗經陀羅尼法門の誦するその功德に勝たりといへり。又念佛の功德は極重惡人無陀方便唯稱彌陀得生極樂。又はいはく、一念彌陀佛即滅無量罪と説り。極重の惡人もひとへに念佛すれば極樂に生じ、一たびも彌陀佛を念すれば即ち無量の罪を滅すといへり。即身成佛のわきまへなからんには、ひたすらに陀羅尼を唱へ又は念佛を申給へ。所作とし給はんには朝夕晝夜のわがちなく一遍もおほくとなへ給へ。たびごとに手あらひ口きよめなどするにもおよはず。しづかなる時は念珠を用ひ給へ。念珠手にあればおのづからわするゝ事なく一遍もおほきしるしありて所作にすゝみあ

り。しかれども所作を心として御前の事ゆめくをろそかなるべからず。つとむべきにまことなるはすなはち御法の一みちなり。おのくのころへ給へなど教化重々におよべば、ながき夜いつしか八こゑの鳥もおどろかせば、大とこいとま申てまかでぬ。御前にもめづらかなる事に聞しめし尼どもはなみだおとしてとうとみあへり。佐の局

これも又わかれをいそく鳥のねに

いまそうき世の夢やさむらん

とか聞えし。

秘籍大名文庫

昭和十二年十一月十六日印刷
昭和十二年十一月十九日發行

定價八十錢

發行所

圖書出版

厚

電話九段三二一八番
振替口座東京五九六〇〇番

生

閣

東京市麴町區下六番町四十八番地

編輯者

福井久藏

發行者

岡本正一

印刷者

山本禎男

印刷所

東京市牛込區山吹町百九十八番地
會社 宗文社印刷所

祕籍大名文庫刊行の辭

近時古典研究熱の昂まるにつれ、古書複製の要求が益々盛んになり、巷間、この種類書の刊行さるゝものが決して尠くはないが、本文庫の如く、寫本の世に一部或は數部しか存するものなく、然も、今日筆寫さへ容易にあらざる稀觀本を主としたる複製の如きは、未だ行はるゝに至らず、識者をして失望せしめること多大であつたが、弊閣こゝに稽ふるところあり、古書の藏書家として學者間に於て垂涎の的となり、又古典知識の第一人者として一代の碩學たる福井久藏博士に諮り、今漸く「祕籍大名文庫」の刊行を見るに至つた。

刊行書目は、寫本として數十金を投じてもなほ今日購ひ得ざる珍本を主とし、百金を以てしても手にし得ざる板本を混へ、中に、その道の學者にすら、未だその存在を知られざる絶品さへ幾多收載されてゐることは、本文庫の嚆に誇とするところであり、また、種目は凡る部門に互り、單に古書の蒐集といふ一點のみよりこれを見るも、絶版の曉には、幾倍或は幾十倍の市價を呼ぶものゝ多數含まれてゐることとは、本文庫の持つ本としての特異性であると信ずる。

宛も本文庫は、博士が學生の大著たる弊閣版「諸大名の學術と文藝の研究」中に擧げられつゝも、然も世人の眼に觸れたることなき珍籍の覆刻であり、該書と文庫と兩々相俟つて、こゝに絢爛たる徳川文化の全貌は識者の前に初めて今日明かにされるであらう。

大方の御支持を期待して已まない次第である。

厚生閣主

秘籍大名文庫

第一期刊行豫定書目

國體本義諸篇	戶澤土佐守正令著	皇朝魂辨、大日本號之說、その他日本精神昂揚の興味ある未刊典籍
治教秘錄	黒田豊前守直邦著	治教略論、家僕教訓、等身を幕臣より起し大名に列した直邦經世談
兵法家傳書	柳生但馬守宗矩著	將軍家指南柳生侯の傳書で特得の兵書、劍禪一味を説き又修養の糧
大東婦女貞烈記	松平鸞岳公子著	我邦上代よりの貞烈なる婦女四十有二を傳し、話柄各種、興趣不盡
藝苑漫筆	松平樂翁公著	建築に關する菟裘小錄、其他茶から庭園、雅樂、繪畫に至る隨筆集
蝦夷島奇觀補註	松前志摩守德廣著	幕末露艦來航に際し松前侯の編した北海風俗慣習動物歌曲曲圖入本
松秀園書談	増山河内守正賢著	六書八體より隸眞八分行草飛白の諸體、著名法帖論評等、用筆圖入
本草啓蒙補遺	黒田樂善侯著	和漢洋の文籍と觀察實驗に鑑み蘭山の本草啓蒙補正を企てた稀觀本
菊經	松平大學頭賴寬著	栽培に關する事其他、器具から害蟲迄圖入で説明した養菊家垂涎書
鷹山公婦女庭訓	上杉彈正大弼治憲著	仁君の鑑と謳はれた鷹山公が六人の孫女に與へた婦徳婦言婦容教訓

服飾漫語	田安中納言宗武著	我邦中世に於ける服裝を説いた有職學の文獻で、貞丈の加註本覆刻
歌學論叢	前田龍澤侯著	今年今月今日の調を高唱し、易の理に和歌を會通せしめた獨創歌論
歷朝詩纂	松平大學頭賴寬撰	論語徵集覽の著者で今百卷の前篇を覆刻、二百四十四家の作を蒐む
名侯歌文集	保科正之堀田正俊其他	名君として知られる政宗、正之から光圀、正俊、光隆の珍籍五種選
蘇明山莊句集	柳澤米翁侯著	米仲に就く事十七年、斯壇の宗匠を以て自他許した米翁公秘籍句集
鳥名便覽	島津薩摩守重豪著	鳥名四百十五種、一々和漢名方言並に疊名を録した一書、鳥界珍寶
古今錢貨譜	朽木近江守正綱著	古文錢震且錢より日本高麗宗南等に及び鑄錢法鑑定法迄圖入權威書
宴遊日記別錄	柳澤美濃守信鴻著	米翁公の觀劇日記、回数實に百卅回に上る中村市村森田三座演劇錄
創垂可繼	大關土佐守増業著	社祭式、年中行事、その他水利農産の大家黒羽侯の遺した偉業可見
淺草寺誌	池田冠山侯著	冠山侯の有名な淺草寺誌、文人交遊、世態人情、宛然江戸風俗誌也

以下續刊 各册定價別 詳細目錄口主

67
532

文學博士 福井久藏 著 (内容見本呈) 帝國學士院研究補助の大著述

諸大名の學術と文藝の研究

菊判背革上製本函入、貴重文献筆跡別刷口繪附、八百頁函入、定價拾圓、送料卅錢

本書は博士が徳川期に於ける學術と文藝の真相を把握せむがためには、時代の主導勢力たる三百諸侯とこれを圍繞する學者文人の遺作を盡く涉獵するの要あることを夙に認識せられ、本業の完成を企圖せられてより東行西走、よく諸侯の秘庫に參じて貴重なる資料を得、爲に博士によりて新しく存在を千古に掲げ得る名作名研究の發見されたるもの尠しとせず、これらは概ね逐次秘籍大名文庫として刊行を見る筈であるが、その熱意は遂に前人未踏の本研究を大成せしめ、徳川期に於ける學術と文藝とはこゝに初めて文化史的に綜合樹立された。名著名作の多くを引用し、貴重寫眞を挿入して記述は平明、現代の史家、文學者、科學者、軍人、歌人、俳人、茶人等を裨益すること多大なるものがある。

内容一班

- 序論(本書の成立)
- 第一 諸侯と儒學 (藩學の興起)
- 第二 諸侯と神道
- 第三 諸侯と佛敎
- 第四 諸侯と國學
- 第五 諸侯と歴史
- 第六 諸侯と地誌
- 第七 政令と敎訓 (一) 政治 (二) 敎訓
- 第八 諸侯と兵學 (一) 兵學 (二) 馬・三犬追
- 第九 諸侯と物等の騎射・諸侯と鷹 (一) 諸侯と科學 (二) 數學・三理化
- 第十 諸侯と蘭學・三理化 (一) 諸侯と科學 (二) 本草・二
- 第十一 諸侯と錢貨 (一) 諸侯と文 (二) 和歌・俳諧・連歌・三俳諧・四紀行文・五・六諸侯と文學・七漢詩・八漢學
- 第十二 諸侯と藝術 (一) 音樂・二繪畫・三書道・四茶道と諸侯 (五) 雜
- 第十三 隨筆・二叢書
- 總 索 引

終